

ゲイ当事者の語りからみた  
ジェンダー・アイデンティティの統合過程

兵庫教育大学大学院  
学校教育研究科 人間発達教育専攻  
臨床心理学コース  
M15060I 阪口 武

## はじめに

近年、日本において、セクシャル・マイノリティ、特に LGBT(Lesbian: レズビアン, Gay: ゲイ, Bisexual バイセクシュアル, Transgender: トランスジェンダー) の権利をめぐる社会的変化は著しい。2003 年には性同一性障害特例法が成立し、2015 年には渋谷区や世田谷区で「同性パートナーシップ証明書」をめぐるニュースが注目を浴びた。しかし一方で、区議会でも同性愛が「個人的趣味」と発言されるなど、まだまだ偏見が根強い現状にある。また、社会の価値体系として、人の性を男女に 2 分する考え方が主流であり、性指向が異性に向くことを前提にした考え方が一般的である。こうした価値観の社会の中では、LGBT 当事者のセクシュアリティは周辺化され、また無いものとして扱われている。

そうした中で、社会的多数者の価値体系から排除されるセクシュアリティをもつ人々は、自身のセクシュアリティをどのように位置づけているのであろうか、そうした疑問から、筆者は本研究を行うことにした。

なお、本論文は以下の 5 章から構成される。

第一章では、先行研究からゲイの社会的実情と心理的発達をまとめて問題と目的を示すとともに、ナラティブ・アプローチを用いたライフストーリー研究と本研究の結びつきを述べた。

第二章では、研究方法や具体的な手続きを述べた。

第三章では、実際のナラティブデータを示しながら、対象者ごとにライフストーリーを考察した。

第四章では、対象者ごとの考察をまとめ、総合考察を行った。

第五章では、結果と考察を踏まえて、本研究の限界と今後の課題を検討した。

## 目次

### 第 1 章 問題と目的

1.1	ゲイというセクシュアリティ	1
	(1)セクシュアリティとは	1
	i. ジェンダー・アイデンティティ	1
	ii. 性指向	3
	(2)ゲイというカテゴリー	4
1.2	ゲイのメンタルヘルス	4
1.3	ゲイへの心理的支援	5
1.4	ゲイのジェンダー・アイデンティティ	7
1.5	本研究におけるナラティブ・アプローチ の位置づけ	8
	(1)ナラティブ研究とは	8
	(2)ライフストーリー・インタビュー	9
1.6	本研究の目的	10

### 第 2 章 方法

2.1	研究協力者	12
2.2	方法と手続き	13
	(1)ライフストーリー・インタビュー	13
	(2)手続き	14
2.3	倫理的配慮	15
2.4	分析方法	15

### 第 3 章 結果と考察

3.1	Aさんのナラティブ	17
3.1	Bさんのナラティブ	34

### 第 4 章 総合考察

4.1	ジェンダー・アイデンティティの統合過程と意見 付けにおける共通性	53
-----	-------------------------------------	----

4.2	ゲイ当事者がジェンダー・アイデンティティについて語ること	54
4.3	インタビュアー・インタビュイーとの関係性	56
4.4	ゲイ当事者への心理的支援	57
第5章	本研究の限界と今後の課題	59
引用文献		61
謝辞		66
資料		67

## 第 1 章 問題と目的

### 1.1 ゲイというセクシュアリティ

#### (1)セクシュアリティとは

人間の性はセクシュアリティという概念で表現される。現在，セクシュアリティは，「身体的性別(sex)」・「ジェンダー・アイデンティティ(gender identity)」・「社会的性役割(gender roll)」・「性指向(sexual orientation)」・「性嗜好(sexual preference)」・「性的反応」「生殖」の 7 つの構成要素からなるものと考えられている(佐々木，2016)。これらの構成要素は互いに関係し影響し合っているが，それぞれ別個のものとして理解されている(針間，2014)。

社会的には，身体的性別が男性/女性で，ジェンダー・アイデンティティが男性/女性，社会的性役割が男性/女性であり，性指向が女性/男性に向くことが一般的であるとされ，この典型に当てはまらない者がセクシュアル・マイノリティとされている。

ここではセクシュアル・マイノリティを理解する上で主要である，「ジェンダー・アイデンティティ」と「性指向」に着目した。

#### i)ジェンダー・アイデンティティ

ジェンダー・アイデンティティとは，日本語で「性自認」，「性同一性」と翻訳され，心理的な性別の自己認知と定義される(針間，2014)。では，「心理的な性別の自己認知」とはいったい何なのであろうか。

ジェンダー・アイデンティティとは，もともと身体的性が曖昧なインターセックスや身体的性を越境するトランスジェンダーなどの臨床研究から生まれた概念である。代表的な定義としては以下の二つが挙げられる。1 つが“自分が所属している性別について知っているという感

覚のこと。すなわち‘私は男性である’もしくは‘私は女性である’という認識のこと（Stoller, 1964）”という定義であり，もう1つが“男性あるいは女性，あるいはどちらとも規定されないものとしての個性の統一性，一貫性，持続性（Money, 1965）”という定義である。

これらの定義は現在でも引用されるが，中村（2006）によると，Stoller（1964）とMoney（1965）の定義は，インターセックスを男女に振り分けるために作られた概念であるため，人間は男女に二分され，それは客観的に測定されうるという前提があった。しかし現在では，性は生物学的レベル・社会的レベルでも想定されえないほど多様化していること（Faust-Sterling, 2000），またジェンダー・アイデンティティは当事者の自己決定からなされるようになったこと（Dreger, 1999）から，上記2つの概念は適さないとされる（中村，2006）。

そこで中村（2006）は，体の性と心の性の2項対立を撤廃し，アイデンティティを個人が日常的に創造され維持されるもの（Giddens, 1991）として，ジェンダー・アイデンティティの概念を以下のように定義した。すなわち，“身体の様々な特徴が，個々の文化・社会生活を通じて自己のアイデンティティ形成とどのように関わるかということについて得た，きわめて個人的な解釈であり，更新し続けられるプロセス（中村，2006）”と定義した。

また佐々木・尾崎（2007）は，Stoller（1964）とMoney（1965）の概念に，性の多様性とEriksonのアイデンティティの概念を取り入れて，以下のように定義している。すなわち，“斉一性・連続性をもった主観的な自分の性別が，まわりから見られている社会的な性別と一致する感覚（佐々木・尾崎，2007）”と定義している。そしてその下位概念として，自己一貫的性同一性，他者一致的性同一性，展望的性同一性，社会現実的性同一性をあげている。自己一貫的性同一性は，自己の性別が一貫してい

るという感覚のことをさし，他者一致的性同一性は自己の性別が重要な他者の思う性別と一致している感覚のことをさし，展望的性同一性は自己の性別での展望性が認識できているという感覚のことをさし，そして社会現実的性同一性は自己の性別が社会のつながりをもっているという感覚のことをさす。

さらに佐々木(2016)によると，性同一性は，女性への性同一性をどの程度強く持つのか，男性への同一性をどの程度強く持つのか，そして規定されない性別への同一性をどの程度持つのかという連続的に変化するものとされている。

## ii) 性指向

性指向とは，相手の性別や性的特徴に基づいて，個人が他者に対して抱く性的かつ情緒的な興奮・欲求のパターンである（佐々木他，2012）。性指向は，生理的欲動と生物学的システムに密接に関連しており，意識的な選択を超え，深い情動的体験や愛着を伴うものとされる（佐々木他，2012）。

性指向の対象となる性別においては，男性と女性だけでなくトランスジェンダーや X ジェンダー(男女に規定されない性別)などが存在し，またどの性別も対象にしないというパターンも存在し，実に多様であることがわかる。

さらに，「女性を対象とする」という場合でも，性行為の対象としてなのか，恋愛の対象なのか，あこがれの対象なのか等，状況によって個人内で性指向の強さの変動が想定される（佐々木，2016）。また幼児期から老年期に至るまでで性指向に強弱があるなど，時間による変動も想定されうる（佐々木，2016）。

## (2) ゲイというカテゴリー

ゲイとは、セクシュアル・マイノリティのカテゴリーとして認知度が上がってきているLGBTの内のGのことをさし、日本語では男性同性愛者と訳される。定義としては、薬師・笹原・古堂・小川(2014)によると、「ジェンダー・アイデンティティが男性で性指向が男性に向いている」とされる。しかし、もともとゲイという用語は、アメリカの人権運動の際に、当事者が自分自身を自己定義するために作られたものである。そのため、現在でも当事者によって、何ををもって自己をゲイと定義するのかは多種多様である。つまり、自己のジェンダー・アイデンティティが曖昧な状態でも性指向が男性に向くというだけで、自己をゲイだと認識する者もいると考えられるのである。

またこの定義を採用することで、ゲイというセクシュアリティの豊かさを損なう可能性もある。ジェンダー・アイデンティティが男性とされているとしても、ジェンダー・アイデンティティが自己認識である以上、その中に多様性が想定される。また、性指向においても同様で、性指向が男性に向くと言っても、性交の対象としてなのか、恋愛対象としてなのか等の様々な諸相が存在する。このように定義を採用すると、性の多様性が本研究において保証されない可能性がある。

そこで本研究では、「ゲイ」については、「自身を「ゲイ」であると自覚する者」と定義し、当事者の自認に任せた。そうすることで、研究者側そしてひいては当事者側の認識に、セクシャリティの多様性を保証した。

### 1.2 ゲイのメンタルヘルス

日本におけるゲイのメンタルヘルスを扱った研究としては、日高(2007)によるゲイ・バイセクシュアル男性を対象とした研究が注目されている。インターネットで行



われた調査（有効回答数 5731 人）によると，20 代の約 68.1%が自殺念慮を抱いたことがあり，15.1%は実際に自殺未遂の経験があると回答している。また同調査で，CES-D 抑うつ尺度と Rosenberg 自尊感情尺度を用いた調査では，20 代のゲイ・バイセクシュアル男性 43.6%が抑うつであり，自尊感情得点の平均が 32.3 点と低い値を示している。また日高（2006）は，異性愛者役割葛藤（同性愛者が異性愛者を装うことで生じるストレス）を強く感じる者ほど，抑鬱，特性不安，孤独感が高く，自尊心が低くなることを明らかにしている。

これに対して渡辺（2005）の 4 人の若年ゲイ男性へのインタビュー調査では，性的指向の受容/非受容の苦悩はあまり語られなかったが，他者と異なる孤立感，ゲイの固定したイメージ，学校での同性愛嫌悪的振る舞い，信頼する友人への罪悪感があることが示された。石丸（2004）は，同（両）性愛者は異性愛者よりも他者からの受容に敏感で，自尊心に与える影響も大きいことを指摘している。

### 1.3 ゲイへの心理的支援

アメリカ心理学会特別専門委員会の『性指向に関する適切な心理療法的対応』の報告書の要約（佐々木他，2012）では，LGB に対しての心理的な支援の必要性を述べた上で，心理療法の主要な要素として以下の 5 点を提言している。「受容と支持」，「包括的アセスメント」，「積極的コーピング」，「ソーシャル・サポート」，「アイデンティティの探求とアイデンティティの発達」の 5 つである。このうちの「アイデンティティの探求とアイデンティティの発達」とは，性指向に関する葛藤を扱い，それに関するアイデンティティの発達を支援することをいう。

こうした性指向に関するアイデンティティの発達は性アイデンティティの発達という概念で様々な研究者によって概念化されており，代表的なものに Cass（1984），

Troiden(1989), Mcarn&Fassinger(1996), 石丸(2008)がある。その中でも, Cass(1984)のモデルがよく参考にされる。

Cass(1984)のモデルでは以下のような6段階を経るとされている。第1段階は, 自分の行動・感情・考えが同性愛である可能性を認識し, それ以前の自己概念が壊れ, 混乱する「アイデンティティの混乱」, 第2段階は, 同性愛者である可能性を受け入れ始め, 周囲からの疎外感を覚える「アイデンティティの比較検討」, 第3段階は, 同性愛者であることを許容し始めたことにより, 私的に同性愛者である自己像と公的に異性愛者である自己像に分断されているように感じる「アイデンティティの許容」, 第4段階は, 同性愛者との交流から, 同性愛を肯定的に捉え始め, 限られた異性愛者にカミングアウト(セクシュアリティの自己開示)を行い始める「アイデンティティの受容」, 第5段階は同性愛者としてのアイデンティティに自信を持つようになり, 同性愛を抑圧する異性愛者を敵対視するようになる「アイデンティティへの自信」, 第6段階は, 異性愛者との肯定的な接触により, 同性愛者であるという要素は, 人間を形作る構成要素の一つにしか過ぎないことに気付く「アイデンティティの統合」, という段階を経る。通常, カミングアウトを行い, それが受容され, 社会生活を問題なく過ごせれば, 第4段階でアイデンティティ形成のプロセスは終了する。

日本でも, LGBに対するスクールカウンセリングや学生相談においての支援の参考にすることが勧められている。葛西(2014)は, カウンセリングを行う場合に, 性的アイデンティティの発達に沿ってその内容, 対応が異なってくると述べている。また柘植(2014)は, カウンセラーには, カミングアウトにまつわる心理的な支援を行う上で, 様々な要因(大学の風土・カミングアウトによって引き起こされる精神状態など)に加えて, クライアント本

人の性アイデンティティの発達段階を検討することが求められていると述べている。

しかし上述したモデルは、アイデンティティにおいて当事者のセクシュアリティの内の性指向を受容する過程が主であり、他のセクシュアリティの要素については触れられていない。確かに性指向のマイノリティであるゲイは、異性愛中心主義の社会の中で性指向を受容しアイデンティティに統合することに困難を抱えている。異性愛中心主義とは、セクシュアル・マイノリティのグループの者にとって不利益になる無自覚な考えで、すべての人は異性愛であるとの前提に立って、セクシュアル・マイノリティの存在が明らかになると、それは異常であり、差別的な扱いを受けて当然であると思うこと（Herek, Gillis, & Cogan, 2009）、である。しかし性指向が異なるということは、異性愛と同性愛の2項対立の中での葛藤しか生まないのであろうか。また性指向が異なることは他のセクシュアリティのアイデンティティへの受容と統合を困難にしていけないのであろうか。「ジェンダー・アイデンティティ」もゲイのアイデンティティを形成する上で、注目すべき要素であると、筆者は考えた。

そこで筆者は、ゲイの生きる困難を明らかにする上で他のセクシュアリティの構成要素である「ジェンダー・アイデンティティ」に注目した。

#### 1.4 ゲイのジェンダー・アイデンティティ

ゲイの「ジェンダー・アイデンティティ」が異性愛の男性とは異なることが考えられる。ゲイのジェンダー・アイデンティティに関する研究としては、多賀（2001）の男性のジェンダー形成に関する研究が挙げられる。多賀のライフヒストリー調査の中で、規範的な男性性に沿わない「性指向」によって「社会的性役割」を体現できないために、否定的な自己イメージの形成を余儀なくされ

ている者がいることが確認されている。また渡辺(2010)のゲイを対象としたライフストーリー研究では、「男子と女子の中間部分という存在」という位置づけや、男子集団への所属感の希薄さなどの語りが得られている。

こうしたゲイのジェンダー・アイデンティティの背景として、様々な社会的要因が考えられる。多賀(2001)は、異性愛者中心主義である社会では、「正常な男」の諸定義の中心に「女性に性的欲望が向かう」ことがあり、それがジェンダー・アイデンティティを支える重要な要素となっているとしている。さらに同性に性的欲望が向くことを認めることは、自身のジェンダー・アイデンティティを否定的にってしまうと述べている。林(2002)によると、大学生を対象にした男性の「社会的性役割」の尺度作成において、「同性愛に対する拒否」が抽出されている。このことから、「男らしく」いるためには同性愛を嫌悪・拒否する姿勢を示すことが期待されていることがわかる。また田中(2009)は、日本では異性愛主義に基づいたジェンダー秩序が徹底化されているために、男性というカテゴリーの意味に異性愛者であることがすでに含まれており、「同性愛」男性は存在自体が不可視化されていると述べている。

これらのことから、ジェンダー・アイデンティティが男性であることに性的指向が女性に向かうことが条件づけられる社会の中で、ゲイ当事者は、自身のジェンダー・アイデンティティを自己に統合させるうえで様々な困難を抱えていることが考えられる。

## 1.5 本研究におけるナラティブ・アプローチの位置づけ

### (1)ナラティブ研究とは

さて、ここで、本研究に用いるナラティブ・アプローチにて述べる。「ナラティブ(語り・物語)」とは、「広義の言語によって語る行為と語られたもの」である(やまだ、

2007)。またやまだ(2000)は、「物語」とは「2つ以上の出来事を結び付けて筋立てる行為」という定義付けのもと“人生の物語とは，意味づける行為であり，人生経験の組織化である”と述べている。さらに竹家(2008)は，物語は，「絶えざる修正と生成による語り直し，構成と再構成の連続とみなされる生成的特徴を有する」と述べている。つまり人は物語ることによって，自身の経験を意味づけ，自己を構築しており，また語るごとに，自己は，経験の意味づけの修正や新たな生成によって，再構築されるのである。

## (2)ライフストーリー・インタビュー

ライフストーリー研究は，人間が生きている人生の物語・生の物語・いのちの物語・生活の物語をナラティブ論の立場から研究する(やまだ，2007)ものである。ライフストーリー・インタビューではエピソードを重んじるので，どのような内容の体験だったのか，その体験とその後の体験との関連はどうか，自分がその体験についてどう思っているのかなど，体験の中身やその後の人生との関連性，その体験の意味づけを深く聞くことができる(やまだ，2007)。ナラティブ・アプローチでは，多様な語り，多様なイメージ，多様な物語の同時共存を許容していることから，どれが正しいか，どれが成功かという問いの立て方をしない(やまだ，2007)。したがって多様な生き方をする人々が，自分自身を語るという観点から，従来声を出しにくかったマイノリティという，弱者の立場にいる人々の声を拾うことが可能となる。

また，物語の時間は，人間の経験する時間に近い(やまだ，2000)。物語の時間は，逆行したり，回帰したり，循環したり，止まったり，いろいろな流れ方をする(やまだ，2000)。その中で，「過去」は「現在」と照合されて，絶えず再編成され，読みかえられて変容していく(やまだ，

2007)のものであり，過去は現在の視点から物語られることによって再構築される。

ライフストーリー研究を用いることで，ゲイ当事者の心理過程や，当事者のジェンダー・アイデンティティを自己にどう意味づけているかが研究に取り上げることができる。また自己やパーソナリティも固定した同一人物としてみなさず，「物語としての自己」という見方をするので，多様性と変化可能性を重視するライフストーリーの聞き取りは，多様な生き方を支援することにも，また，インタビューの今後の生き方を問い直すことができる。

## 1.6 本研究の目的

以上のことから，本研究では，ゲイ当事者の語りに注目し，以下の2点を目的とした。一点目は，彼らがジェンダー・アイデンティティを自己にどのように統合していく過程の仮説を生成することとした。そして二点目は，ゲイ当事者が自身のジェンダー・アイデンティティを自身の人生にどのように意味づけているのかを明らかにすることをも目的とした。やまだ(2000)は，“自己は「文化・社会・歴史的文脈」に媒介されるので、自己の構成に文化や社会や歴史的文脈が本質的に関わる”と述べている。また，金城(2016)は，マイノリティへの支援において，普通であると認識している人々の暮らす社会の中で，当事者がどのような生きづらさを抱え，どのような形で適応することが，心理的負荷を減らすことになるのかを考え，心理職が「個と社会をつなぐ支援」をこころがける必要があることを述べている。このことから，ジェンダー・アイデンティティが男性であることが異性愛者であるという社会的文脈において，ゲイ当事者がどのようにジェンダー・アイデンティティを意味づけているかを明らかにすることは，当事者の生きづらさを理解する上で意義があるのではないだろうか。そうした理解によって，

臨床の現場において、心理職と当事者の相互作用の中で、当事者自身にとって居心地のよい性の有り様を見つけていく一助になるのではないかと、筆者は考えた。

また、特定の個人だけに特有害な事例研究をしたとしても、得られた知見で何らかの意味で「一般化」できる「代表性」「典型性」を備えている必要がある（やまだ，2006）。「多様性」「過程」を重視する質的研究は、「一貫性」「同一性」「不変性」「一貫性」という信頼性の基準では調べることができない。自己のデータを公共化して、時間において繰り返しマイクロアナリシスすることで省察的に再現できる（やまだ，2006）。また自己のデータだけではなく、他者のデータも公共化し、相互に対話的に省察を重ねることが、信頼できるデータや解釈を生み出していくと、やまだ（2007）は述べている。よって本研究では、個人差を考慮したよりきめ細かい他者理解やインタビュー場面における関係性の構築について講じていくことを目指した。

## 方法

### 2.1 研究協力者

本研究の協力者は，自身のセクシュアリティをゲイと自認する大学生以上の者とした。日高（2000）のゲイ・バイセクシュアル当事者の主要なライフイベントを調査した研究では，中学校・高校生の間に性指向に関連した葛藤を引き起こすようなライフイベントを集中して経験することや17.0歳に「ゲイであることをはっきり自覚した」ことがわかっている（表1）。よって本研究では，様々な葛藤を経験し，それを通して自身のセクシュアリティについての自認がある程度明確であると考えられる大学生以上の者を対象とした。

表1. ゲイの思春期におけるライフイベント（日高，2000）

ライフイベント	平均年齢
ゲイであることをなんとなく自覚した	13.1
「同性愛・ホモセクシュアル」という言葉を知った	13.8
異性愛者ではないかも知れないと考えた	15.4
ゲイであることをはっきりと自覚した	17.0
ゲイ男性と初めて出会った	20.0
男性と初めてセックスした	20.0
ゲイの友達が初めて出来た	21.6
ゲイの恋人が初めて出来た	22.0

サンプリング方法は，研究対象となる事象について豊かな情報を当ててくれる協力者を選ぶ必要があるため，非確率的サンプリングである関係的ネットワーク依拠サンプリングを用いた。このサンプリング方法では，対象者数が少なく，特定の経験をした人を対象にするため，サンプリングの偏りがでてしまい，結果の普遍性は保証することが難しい。しかし，質的研究では，集団の特徴を知るとき，集団の均質性ではなく，多様性や典型性を求めてサンプリングを行う（やまだ，2006）。よって，仮



説生成を目的とする本研究では，普遍性よりも多様性・典型性を重視する方が意義深いと考えた。

よって，筆者の知り合いを通じて資料を配布し，返答の中から，同意が得られ，本研究の対象として条件に該当する者を研究協力者として選定した。

その中で，ゲイ2名の調査協力の同意を得られた。これら対象者のプロフィールを表2に示す。

表 2. 調査対象者の属性と調査状況

	年齢	職業	最終学歴	居住地	調査回数	調査期間
A	20代前半	学生	大学在学	関西地方	5回	X年7月～9月
B	20代前半	学生	大学在学	関西地方	3回	X年7月～8月

## 2.2 方法・手続き

### (1) ライフストーリー・インタビュー

本研究では，ライフストーリー・インタビューを用いた。ライフストーリー・インタビューでは，語り手の発話を阻害しないように配慮しつつ，比較的自由的な会話に基づくインタビューが行われる（桜井，2002）。また保坂（2000）は，インタビュー法の利点として，協力者の反応に即座に対応し，さらにはそれをデータ収集の新たな契機として積極的に利用できることや，質問紙法では捉えきれない深い人間理解，観察法では知り得ない被検者の心理過程を直接明らかにできることを挙げている。つまり，ライフストーリー・インタビューでは，質問紙では捉えきれない情報をすくうことが可能であり，多様な人生を生きる協力者ひとりひとりを深く理解できることができるのである。

また，桜井・小林（2005）は，ライフストーリーは必ずしも語り手があらかじめ保持していたものとしてインタビューの場に持ち出されるものではなく，語り手とインタビュアーとの相互行為を通して再構築されるものと述

べている。このことから、協力者と研究者とのインタビューの中で行われる相互交流の中で、協力者の持つ過去の体験が再構築され、その中の協力者の統合過程が表れると考えられる。

以上のことから、本研究では、データの収集方法としてライフストーリー・インタビューを用いた。

## (2) 手続き

書面でのインフォームドコンセントをとり、1回60分程度の半構造化面接を行った。聞き手と語り手の相互作用でデータが生じる為、1～2回の面接調査では語り手の作るナラティブに矛盾が生じる可能性がある(枝川・辻河, 2011)。よって、面接回数は調査協力者の実情に応じて柔軟に設定した。

インタビュー・スケジュールは、宮腰(2008)を参考にして、以下の質問項目を設定した。

- ① ご自身のセクシュアルティについて思うことをご自由にお話してください。
- ② ジェンダー・アイデンティティについて、思うことについて自由にお話してください。
- ③ あなたのジェンダー・アイデンティティにゲイであることはどのような意味がありますか？
- ④ 自分がゲイであることに気付いてから今に至るまでジェンダー・アイデンティティに何か変化はありましたか？

必ずしも上記の質問項目に従って質問することはなく、協力者の発話内容から質問の順番や質問の仕方を変更した。また、必要に応じて追及質問を行った。

インタビュー内容は研究協力者の同意のもとICレコーダーで録音し、逐語録に書き起こしたものをデータとした。

### 2.3 倫理的配慮

研究にあたって、事前に研究の趣旨を説明し、研究協力への同意を得た。研究協力者には研究の目的、インタビューに要する時間、答えたくない内容には回答を拒否してもよいこと、途中で辞めたいと感じた場合にはいつでも辞めることができること、インタビューの記録は録音されること、内容データは研究目的以外では使用しないこと、研究協力者が特定されないように個人情報の管理・記載に配慮すること等を、研究協力依頼時とインタビュー開始時に説明し、口頭と書面にて協力の承諾を得た。なお、プライバシーに配慮するため、個人情報となる名前等は順にアルファベットで表記した。

また、インタビュー実施に当たり、兵庫教育大学倫理審査委員会の承認を受けた（受付番号：7）。

### 2.4 分析方法

ナラティブ・アプローチの枠組みを用い、シーケンス分析を行うことによって、ゲイ当事者の内面に焦点をしぼり、協力者がジェンダー・アイデンティティを自分の人生にどのように意味づけているのかを分析した。この手法では、“語り手の主観的(感情的)世界やアイデンティティの研究に適し、そのような主観的世界への社会・文化的環境からの影響や「権力」の存在についても明らかにできる(川野, 2005)”ことから、本研究で採用した。具体的には竹家(2008)と枝川・辻河(2011)を参考にした。まず、面接の逐語録から、協力者の語りに即した生活史を作成する。次に語られた継起順序、特に聞き手と語り手との「いまーここ」の関係性をもとに生み出された語りの流れを捉え、語り手の人生の鍵となる言葉を見出した。その上で、語り手の経験に対する評価・態度が明らかになる語りをピックアップしながら、語り手のライフストーリーを構成した。

## 結果と考察

2名のインタビューの語りの継起順序の流れに沿って、当事者の経験者の意味づけが明確になると思われる語りを□で囲んで示した。また竹家(2008)と枝川・辻河(2011)の分析方法に倣って、語りから得られた現実の年表を作成し、語りの始めに提示した。□内のA、Bは表2におけるインタビューー(協力者)を、Iはインタビュアー(筆者)を指す。下線は特に印象的な語りを、笑い等の動作を( )で囲んで表記した。このようにAさんとBさんのライフストーリーを再構成し、経験の意味づけを考察した。

引用した対話は、なるべき語られた言葉をそのまま引用した。言葉の編集を行わないのは、語りの編集によって語りの意味を分析者(筆者)によって改変する可能性があるといった、やまだ(2007)のいう対話的省察のためである。特に対話的省察はインタビューーの発言を含む自己のデータを公共化することで、データの読み手との対話的省察を図ることになる。また、インタビューーは明瞭に自己の考えや経験を語ってはいない。特に重要な話題は、自身の感情を揺さぶられた言葉、自身のこれまでの考えを振り返る等は、言いよどみや語り直しがある。それを文字化により明確に示そうとしたためでもある。さらに語りの順番は時系列ではない。過去のことを話していても、話題の関連性から、他の時代へと話が連なっていく流れはインタビューの場において多分にみられた。このため、提示した語りは文法等に適切な表現で整理されておらず、秩序化されていないことをお断りする。

なお、語りの内容がわかりにくいと分析者が判断した場合は、[ ]で補足説明を加えた。



### 3.1 Aさんのナラティブ

Aさんは20代前半のゲイの方である。小学校高学年のときに自身がゲイであることを自覚しており、現在は大学生である。Aさんの5回の語りにおける現実の年表を表3に示す。

表3 Aさんの語りからの現実の年表

*家族構成:父、母、兄、姉	
～12歳	性指向が男性に向くことを自覚する。
12～15歳	中学校入学
15～18歳	高校入学
18歳～現在	一年浪人して、予備校に通う 教育大学に入学 アプリを利用してゲイの方と交際する。 アプリを利用してゲイの友人ができる。

Aさんのナラティブを精読し、構造的にまとめると、以下の3つのテーマがみいだされた。すなわち、【性指向の意味づけ】【マスコットとしてのセクシュアリティ】【異性愛社会でのジェンダー・アイデンティティの意味づけ】である。

#### 【性指向の意味づけ】

##### ゲイであることへの意味づけ（第1回目の語り）

I:	ゆるくて難しい質問なんですけれども、お答えしていただけたらなあと思います。まずですね、ご自身のセクシュアリティについてですね、思うことについてご自由に話してください。
A:	思うこと…。
I:	はい、ご自由に。
A:	やー、なんかいつからそうやったんみたいな話になることはよくありますけど、僕は何か割と早かって、小学校5年生ぐらいからかな？割と、なんというかな、早熟やったんで。よくパソコンとかで普通の（異性愛者向けアダルトビデオ）を見てたんですけど、いつから転換したのかはわからないんですけど、いつの間にか見るジャンル変わってた。（笑う）
I:	ほう、小5でいつのまにか…（中略）
A:	んで、なんか普通に戻そうとか、ごまかそうとかもせんかったみたい。意外なことあるんですけど、まあまあそう、高校ぐらいまでは矯正でき、矯正って言い方あれやけど、矯正できたらいいなあと思ってたんですかな。
I:	普通に戻そうと思わなくて、高校生までは直そうと思ってたって、なんか相反するような感じが…。
A:	てか、小5の時にはそういう方面に入ったものよくはないなと思ったりながら、矯正しようと思いつつ、ぼんやりは直さなあかんああって、困るなああって。別に行動がどうこうじゃなかった。
I:	困るなあっていうのはどういうことに？
A:	世間体。
I:	ああ、世間体は大きいですね。
A:	世間体しかない！（笑う）
I:	世間体しかない。（笑う）
A:	世間体しかない、そりゃ親もおるし、俺は一人っ子じゃないだけまだましやし。
I:	あ、そうなんですか？ご兄弟は？
A:	上が2人で、姉と兄で、僕っていう。
I:	あんまりじゃあ、自分が子どもを産まないっていう、強大なプレッシャーはない感じですか？
A:	うーん、そうなものごとを深く考えないので、まあまだましやろって思うくらい。（笑う）

A さんがゲイであることへの気づきには明確な転機というものが存在しない。性指向が男性に向くという気づきが、アダルトビデオで性的興奮が向く対象が「いつの間にか」切り替わるというように、意識的に気づきながらも曖昧に体験されていた。宮腰(2008)は、LGBのセクシュアリティの受容の難しさとして、気づきの困難を挙げている。その気づきの困難の中で、＜同性に惹かれる戸惑い＞があり、LGBは自身が異性愛の枠組みにはまらないことに疑念をいだき、その体験は衝撃的であると述べている。しかし A さんの場合、「早熟」と述べていたように、周囲が性愛に関心が薄い状況下であるために、異性愛の枠組みに当てはまらなにかもしれないという感覚を周囲から受けることがあまりなかったためと考えられる。そのため、性指向の気づきによって大きな戸惑いが生じなかったのであろうことが推察された。

そうした中で、中学と高校での生活の中で、自身の性指向を「矯正」しようとする意識が芽生えている。眞野(2014)は、学校という場がジェンダー及びヘテロセクシズム/ホモフォビアの再生産の機能を果たしていると述べている。A さんは学校生活の中で、異性愛の枠組みを実感し、自身の性指向を否定的に捉え矯正しなければと思うようになっていく。しかし、矯正しなければという考えも「ぼんやり」としたものであり、A さんを脅かす体験として経験されていなかった。宮腰(2008)は、LGBが自身のセクシュアリティの受容の危機への対応として、セクシュアリティを保留にして早急に答えを急がない“時熱”を挙げている。A さんも自身の性指向を矯正できるかもしれないものとして流動的なものとして捉え、周囲からの圧をあまり深く考えないように鈍化していたと考えられる。

I: 無理やな…、確かに無理やなってるんですけども、なんだろう、無理やなって受け入れられちゃうのってけっこう葛藤というか、ありそうやなって。

A: ぼんやり。

I: ぼんやりでもありますよね。

A: 変えられたらいいなとは…、なんやろな…、なんやろ？うーん。うん、なんとなくわかってたっていうのは一番しっくりくる感じ。表現としては。

I: なんとなくわかってた。

A: うん、どうせ無理やろっていう。直せへんけど、てか、直す気もあんまないけど。(笑う)別に 矯正しようすることに努力さくとも思えへんけど…うーん。

I: なんか、本能的なところって感じなんですかね？なんか奥深いところで…、無理やなって。

A: なんか本能っていうと語弊がありそう。

I: そうですね。

A: (大いに笑う)

I: (笑う)

A: まあね、どんな動物でもそういうの少数いるっていうらしいし、本能って言ってもいいかな？

I: なんか違うっぽいんですけど、なんか無理やなって、なんかしらあるんですよね。

A: なんか、こっちになるのって、先輩にされてとかジョッキングなことされてって聞いたことある けども、自分はそういうのなかったんで、ぼんやり変わっていったっていうか。うーん、小学生 のときとか、好きな子誰だっていうのも適当に合わせただけども、やっぱり潜在的にあったの かなっていうのは思わんでもないかな？そこに早熟だから早く気付いたって。

ここでは、Aさんは肯定的に諦めることによって、自身の性指向を受容することにいたっている。性指向が男性に向くことを矯正できるかもしれないと“保留”することによって、性指向によって葛藤することを「ぼんやり」としたものとして、Aさんは回避していると考えられる。そのため、性指向を受容することが、「なんとなくわかってた」と、肯定的なニュアンスを含んだ諦めとして意味づけられていると考えられる。

### 内在化されたホモフォビア（第1回目の語り）

A: で、そやね、ジェンダーとかそういう観点でいうと、だから女の子になりたいとかとは思わへん…かな。

I: 女の子になりたいとは思わへん。

A: もちろん！ああ、いいなあって思うけども。

I: いいなってどういうことですか？

A: え？だって、普通にできる。

I: ああ、女の子が普通に彼氏ができるっていうことですか？

A: 女の子とかが、普通に、普通に外とかで、順当にいたら付き合うとか何々っていうのがあるっていうのは、まあ、何て言うかな、外で、男女であれやな、男同士の場合、それがイチャイチャしてるっていうのは何となく公害を振りまいているっていう意識があって…。

I: 公害？

A: いや、意識し過ぎて言われるんですけど、なんか、第3者から見てみて気持ちのいいものではないやろって。まあカップルもそうやけど、それはそれとして。(笑う)まして醜いものではないかなって思うから？

I: 確かに公共の場でそういうのできるっていうのは羨まし感じがするんですね。

A: うーん、なんか、カップルスポットとかに行ったりしたり、できない(笑う)

I: そうですね。

A: できない。一回、その知り合った人と普通に遊園地に行ったときに、何やったかな？観覧車に乗ったことがあって。

I: はあはあ。

A: 別にそこまでおかしくはないかなって思うんですけど、めっちゃくっちゃ周りを意識しちゃって、僕が言われてるんじゃないかって。

I: ああ。そうですね観覧車って二人でのるっていうのは邪推されそうではあるっていう…。



A: そう、気にしちゃって、言ってるように聞こえた人らをめっちゃ見てしまうっていうのがあって。

I: はいはい。

A: 今考えたら、そうせんでも別に、なんやろな…。

I: うーん。

A: うーん。

I: 今考えると、そんな見てるってわけじゃないと、そう思うんですか？

A: いや、意識し過ぎやっとなーって。まあ、言っとった可能性もあるけど…、言っちゃうんかなっていう思いが、別に見んでもほっといたらよかったやんって。

性指向を肯定的に諦める形で受容している一方，女性への羨ましさという語りの文脈の中で，公共の場で付き合っている男性といることが周囲に迷惑をかけてしまっていると感じてしまうと，Aさんは述べている。平田（2014）は，同性愛を合理的な根拠なしに否定的に捉える態度のことをホモフォビアとし，これがLGB当事者自身に内在化されたものを内在化されたホモフォビアと述べている。「公害を振りまいているって意識」と語っていることから，自身の性指向を否定的に捉えていることがみられ，Aさんがホモフォビアを内在化していることが推察される。この内在化されたホモフォビアの為に，同性愛者であることを公にすることによりかなり否定的にAさんが捉えていることが考えられた。

またこうした内在化されたホモフォビアによって，交際相手とデートスポットにいることに，Aさんは迫害的な不安に襲われている。ゲイは“隠れたマイノリティ”と言われることもあるように，周囲から見ただけでゲイだと断定されることはない。だからこそ，Aさんにとって，交際相手というといった，ゲイとして公の場に出ることは，自身に否定的なレッテルを貼られるリスクを冒すことであり，不安を喚起させるのであろう。「周囲を意識しちゃって」という語りから，そうした不安が迫害的に体験されていることから，内在化されたホモフォビアの影響の大きさが推察された。

## カミングアウト（第1回目の語り）

- I: まあでも、カミングアウトっておおきいですよね。誰かにするのって。  
A: いやー、怖い。いやー、寮やし、僕基本ボディタッチが多くて。  
I: そうなんですか？  
A: うん多くて。それで、いざそれをいった場合に、じゃあそれ何やったんって、いう。もちろんそういう意図はないけど、まったく無いんやけど。そういう視点が、加わってしまったら、なんか。  
I: 過剰に思われるのはいやっていう。  
A: そんな余計な情報はいらなかなって。  
I: 確かに。そういう感じで思われるのは断固として嫌な感じ？  
A: なんか。付き合いづらくなる。  
I: 付き合いづらくなる。  
A: もちろんしよと思ったら、できるやつはおるけど。  
I: おるけど？なんか壁みたい、段差みたい？  
A: そこは自然と不思議と割り切れますね。なんでやろこれ。なんか、別にそんな。  
I: 別に知ってもらう必要もないなって、話す必要もないなっていう感じ、話さなくてもいいやって感じですか？  
A: 別に友達同士でも何でも知ってるわけでもない。別に言わんでも、いいかなって…。

ここでは A さんがカミングアウトすることへの恐れが語られている。A さんは、友人間でのボディタッチが、自身の性指向を開示することによって、「そういう視点」つまり、性的な意味合いを含んでしまうことによって、友人と「付き合いづらくなる」ことに恐怖を抱いていた。竹村（2002）によると、“男のホモソーシャリティの基盤をなすものは同性愛嫌悪と女性軽視である”と述べている。また林（2002）の調査では、男性役割の社会的規範として“同性愛に対する拒否”が抽出されている。このように男性同士の交流には同性愛的な関わりはご法度であり否定的なものである。そのため、A さんはカミングアウトによって男性の友人との交流がネガティブなものになってしまうことを恐れざるを得ないことが考えられる。

- I: えっと、友達にカミングアウトは考えたことがあるんですか？  
A: ちょっと考えたことがある。いったらどうなるかなって、やっぱりなんか、なんか、肝心なところでさけ出せないから、言ったところで価値観を共有できるわけじゃないから、あんまり意味はないかなーって。ちょっと負担をかけて、自分はスッキリしたいだけかなってか、あるから、それやったら自分で抱えといた方がいいかなって。  
I: なるほど言っても、理解とか共感が、  
A: 得られるとは思わないし。友達の中でも、こいつはいてもあんまりよくないやろなっていうやつもあるし。  
I: 向こうの負担になるくらいだったら言わない。先ほど、こいつは言わんほうがいいやろなっていうラインはどこなんですか？  
(中略)  
A: 言ったって、だってあの人が良かったねとかの話できるわけないし。  
I: あー、なるほど、なるほど。  
A: こんなことあってんってするのどうって。こんな人に…。  
I: セクシュアルの話をするとかみ合わない感じがするってことですかね？  
A: うん、そうですね。  
I: そうなんだ。

I: そうなんだ。

A: うーん、やからまあ無いかなって感じかな？

I: それじゃああの人がいかなって話はどういう人に話すんですか？お仲間ですか？お仲間の友達はおられたり？

A: いや、話さない。

I: 話さない。

A: もとから僕は相談とかしない性質やったんで、全然誰にも、性の話でもそうやし、嫌なことあっても、まず学校の話とかも全然家出しなかったし。だから親が知ってる俺の友達っていうと、親ぐるみの付き合いがある人だけ。家でどんな感じの友達とかと接してるとかも全然しゃべらないで。兄は逆によししゃべるんですけど。僕はだから全然。まあだからそんな感じやから、友達にもせえへんっていう。

I: 友達にカミングアウトするっていうのにメリットがないっていう？

A: そうそうそう。それに迷惑かけると思うし。相談するにしても価値観が違いすぎて無理やと思うし、別に相談しないし、じゃあいらないあなって結論。

さらに A さんは、カミングアウトしない理由として、価値観を共有できるわけではないこと、カミングアウトすることで相手に負担をかけてしまうことを挙げた。渡辺(2005)の調査では、ゲイは他者への信頼に応じきれないことで罪悪感を覚え、そしてまた自分の性指向を明かにした上での新たな関係づくりを求めると述べている。また風間・飯田(2010)は、スポーツをしている男性へのインタビュー調査から、男同士の結びつきは、女性を性の対象とするという同質性のうえに成り立っていることを示唆した。A さんは罪悪感を覚え、カミングアウトすることで「スッキリ」したいと思いつつも、男同士の関係を壊すことによって、新たな関係を構築することが、相手の迷惑になると思っていることが考えられる。また、価値観の共有ができないことから、新たな関係が構築することができ得ないとも思っていることも考えられる。

また、カミングアウトによって、A さん自身が友達のジェンダー・アイデンティティを揺るがす存在になってしまうことが、相手に「迷惑かける」と、A さんが体験していることも考えられる。河口(1999)は、異性愛男性の性的アイデンティティは、女性を性的対象とし、男性から性的対象とされないことで成立することが示唆した。このことから、A さんがカミングアウトすることは、友人たちにとって、自分が性的対象と見られることを直面化させ、性的アイデンティティを揺るがすことになる。こうしたことから、A さんにとってカミングアウトす

ることは、友人に「迷惑かける」行為と捉えていることが考えられる。

### 【マスコットとしてのセクシュアリティ】

#### 「かまってちゃん」なジェンダー意識(第2回目の語り)

第1回目のインタビュー時に、自身のセクシュアリティを語る中で、授業で俵万智の授業の中で短歌を作成したことが語られた。そこで第2回目のインタビューでは、Aが作成した短歌(表4)を題材にした。

表4. Aさんの短歌

①暇だから 話をしようと 話しかけ 既読待ってる 私は忙し  
②恋愛は 駆け引きだよと 言われても 気にしてほしくて すぐにやく世話  
③君に会う ときにはいつも 被る猫今日被る お料理上手  
④知り合いが 多くていいね と言ってくれる 君のことこそ 僕は知りたい

- I: それじゃあ次ですけど、『恋愛は…』というやつですけど。  
A: よく言うやつですけど。  
(中略)  
I: え、そういうのって実体験なんですか？恋愛のやつなんですか？  
A: うーんと、恋、恋、恋か。いや、うーん、これは普通にかまってちゃんがでてるみたいな。  
I: ああ、かまってちゃん。  
A: うん。別のこれってやつじゃないやつ、これも。  
I: ああ、友達にやつですか。  
(中略)  
A: うん、なんか仲良くなった子とか、ツイッターとかで他の子とからんでるのをみると、いいなー、と。  
I: どういう感じなんですか？  
A: 羨ましい感じ。  
I: どういう相手にどういう気持ちなのかなって。  
A: うん。懐いてくれる後輩かな。  
(中略)  
I: 後輩への気持ちってどういう感じなんですかね？  
A: かわいい、愛でたい。  
I: ちなみに男の子ですか？  
A: でも、別にどうこうってわけじゃなくて、うん。したいと思いつつも。愛でて欲しい。  
I: したいってことはどういうことなんですか、恋愛的な？  
A: いや、恋愛じゃない。誰でもいいのかな、おれ？うわー。(笑う)  
I: どうなんでしょう？  
A: 難しいなー。はい、かわいい、かわいいてのをしたいし、されたい、みたいな。  
I: あー、したいし、されたい。後輩に対して自分もしたいし。  
A: なんならされたいって感じかな。

ここでは短歌①に詠ったAさんの体験が語られている。①の歌は、忙しい中でも相手とのやりとりがしたく

て、気にかけて欲しくて、つつい暇であると言ってしまふ気持ちが詠われている。Aさんは恋愛の歌の題材として男性の友人関係と先輩後輩関係を取り上げており、そこに恋愛の要素は無いとし、歌には自分の「かまってちゃん」が表れていると語った。そして、そこには「かわいい」「かわいい」と「愛でて欲しい」という気持ちがあることが語られている。

- I: ここではお料理上手ですが、実際にどんなねこをかぶるんですか？  
A: なんか、意識として被ってるのか、無意識に被ってるのか微妙な感じなんで、自分でも被ってるつもりないけど、かまととぶつとるかなー、みたいな。  
A: (中略)  
I: どうしてかまととぶるんですか？無知ぶるんですか？  
(中略)  
A: その方が、なんか、かわいいんかな、みたいな。(笑う)  
I: 知らないって言うてる方が、かわいいんかなと。  
A: かな一つと。  
I: かわいく見られたいって感じで。  
A: (笑う)う、うーん、そうかなー。そうやなー、そうかなー。  
I: 改めて、僕から言われてみて、どうなんでしょうか？  
A: 堪える。何ていうやつだ。いやー、うん、いや、わかってるねんで、ただの。  
I: 何ですか？  
A: かわいく、普通の、普通の男性がこう、ねえ？かわいいみたいな、うーん。  
I: ええ、何ですか？  
A: 普通に考えてかわいくないけど、でも、見た目とかね、外見とか、そういう意味で、でもかわいいって言われたがる、ていうのが嫌やなー。  
I: え、嫌なんですか？  
A: 改めて考えると、嫌やな。でも、そういわれたくて、行動する自分も、おるから、かわいいって言われたら嬉しいし、かわいいられようと動いている。  
I: かわいがられたいんだけど、かわいがられようと動く自分はなんか。  
A: いや。  
I: 客観視すると？  
A: いや。客観視するといや。(笑う)何しとんやろ一つて。でも主観的に見ると、なんか、素でそういうところもあって、意識、全部が全部意識じゃなくて、ほんまに意識してなくてなんかそんな感じにふるまってるようなところもあって。  
(中略)  
I: そういう無意識的な行動は何を求めているんですかね？今考えると。  
A: かわいがられたいんじゃないですか？いろんな人とに。  
I: 結論そうなるんですね。  
A: 結論、かまってちゃんなんやなー。

短歌⑤を題材にして、Aさんのかわいがられたい気持ちとジェンダー・アイデンティティが男性であることの葛藤が語られた。Aさんは「かわいく」見られたい思いから、そうした行動をとっているが、それを客観的な視点で捉えなおすと、身体的性別とジェンダー・アイデンティティが男性である自分がそう思い行動していること

に嫌悪感を抱いている。Aさんはそうした葛藤から、自己を「かまってちゃん」と意味づけることで、自分の気持ちと男性であるジェンダー・アイデンティティをうまく統合していることが考えられた。すなわち、「かまってちゃん」だから仕方ないと、肯定的に諦めることで、「かわいく」思われたい自己と男性である自己の折り合いをつけているのである。

マスコットキャラのジェンダー(第2・3回目の語り)

- A: 中学校実習を行った時も、その中学生に、マスコットキャラだねって言われて、それを一週間程度で言われるっていう、自分のそれまでの行動を、まあ外見とかもあるかもしれへんねんけど、それを言われて割と嬉しかった自分。うーん。かわいがられたいかなー。
- I: 実習のときのどういったところがマスコットキャラに？
- A: いや、よくわからないです。そのときは。まあ、体系もあるんやけど。
- I: ふるまいもキャラクター？
- A: チック？そんなつもりはないんやけど。普通にやっててびっくりした。
- (中略)
- I: マスコットキャラがうれしいっていうのは、まあかわいがられるってところなんでしょうか？
- A: そうなんだろうかねー。いやー、きついなー、でちゃった。
- I: なんできついって思っちゃうんでしょうか？
- A: だって、ええ年した男がかまってちゃんってどう？
- I: ああ。ええ年した男がかまってちゃんだとなんだかきつい感じがする。
- A: うん。うん。うん。(笑う)
- I: (笑う)
- A: どうなんそれって思うけど、かえられへんのやろな一って。無意識に選択した行動が、もはやそれがつながっている気がする。普通に選択した行動がそこにつながっているような気がする。
- I: なるほど。そういうええ年下男がそういうことをすると、きついって感じがする。
- A: うーん、うーん。思うけど、でも、もうなんか染みついてるって感じがする。実際、かまってちゃんやし、かまってほしいし。やから、むしろ、自分の知らんところからんでるっていう、他の人がギャーギャー言ってるのは、あんま知りたくないのかもしれない。羨ましくなっちゃうし。
- I: 他の人がやられていると、羨ましくなる。
- A: いいな一ってなる。(笑う)
- I: (笑う)なるほなるほど。
- A: いいな一、こっちにも来てくれへんのかな一ってなる。いややな、いややな一、なんか。

この語りでは、教育実習の時に、生徒たちから「マスコットキャラ」と言われ、それが「嬉しかった」と体験した経験が語られた。ここでも「嬉しい」と思う一方で、客観視すると男性である自分がそう思うことに「きついなー」と感じている。しかし、そうした「かまってちゃん」の自分は無意識まで根付いており、肯定的に諦めることで、そうした自分をポジティブに捉えなおしていることが考えられる。

I: それは昔から、子ども頃からですか？

A: うーんと、いや、そーでもないんかな？いや、小学校の時はいじめられキャラではあったんかなー。でも、なんていうかな。普段は図書室に割とこもりがちで、そんで他の人からなんか絡まれたら怒った感じで追いかける感じ。がずっとあって。中学校の時は、ちょっと、それが控えめになったかな、クラス替えになって、他の人とも絡むようになったし。で高校もうーん。普通にいじられるってほどでもないかな。で、そんなにやりたいようにって言って、あんまり好かれるように行動してたって感じでもないかな。まあ八方美人は八方美人やったと思うんですけど。共通して、やっぱり、顕著になったのは大学以降なのかな。浪人中はどやったやろ？まあ浪人中は忙しかったし。大学生になってからなのかな。まあ、若干活動的になった気がする。

I: 活動的っていうと？

A: 活動的っていうと語弊があるかな。なんだろう、用もないのにラインをするようになった。

I: なるほど、かまってほしいみたいなことが増えたってことですか？

A: うんうん。

I: なんかきっかけがあったりするんですかね？大学生ということは。

A: うーん。うーん、今まで運動部には入ってたけど、後輩らしい後輩みたいなのはなくて。で、逆に今になってから、先輩みたいななんに來てくれる後輩ができるようになったからかな。それも1つかな。

I: ああ、後輩ができるようになった。後輩らしい後輩が…。

A: なんていうか。

I: 後輩ができたことが一つ。てことはもう一つあるんですか？

A: そうですね。なんやろー、なんか、あれかな、大学になって、アプリとかでこっちの人とかと交流するようになって、で、なんやろ、あれかな、承認欲求ができたのかな。

I: 承認欲求？

A: もっと自分を見て欲しいな思うようになったからかもしれない。だからかまってちゃんなのかもしれない。  
(中略)

I: それで、承認欲求っていうのは？

A: やっぱ、愛されたいのかな？(笑う)後輩にも、先輩にも愛されたいのかな。先輩はちょっとなー、なんか何やろう、うーんでもそうかなー。

I: でも、大学生になってこんなに愛されたいとか承認欲求とかがでてきたんですかね？

A: ちょっとオープンになったんかな。

I: ああ、オープンになった？

A: 今まで秘めてて自分も気づかなかった。もはや想像やけど。

A の マスコット キャラ としての ふる まいは、小学生の頃からであるが、大学生から顕著になったと、A は述べており、明確な転機としては、後輩ができたことと、アプリを通したゲイとの交流を挙げている。眞野(2014)が、近代の学校はジェンダー及びヘテロセクシズム/ホモフォビア再生産の機能を果たしていると述べているように、現在の学校教育の中では、同性愛は無いものとして扱われている。そうした中で、LGBT サークル等が許容される大学という自由度の高い環境下は、ゲイとしての自分を許容し表現しやすくなると考えられる。また Cass(1978)の性アイデンティティの発達段階の第4段階では、同性愛者は同性愛者同士の交流によって同性愛を肯定的に捉えるようになり、限られた身近な異性愛者にカミングアウトし始めるという。同性愛を肯定的に捉え

ることは、自分の性指向を認めることであり、すなわち自分が男性を愛すことと自分が男性から愛されることを許すということであると考えられる。Aさんは大学生になって、他のゲイとの交流を通して、ゲイである自分を受容したことで、恋愛を行うことができるようになったことで、承認欲求がでてきたと考えられる。

- I: 改めて、自分はかまってちゃんっていう性格とセクシュアリティっていうのは？曖昧な質問なんですけども。
- A: でもやっぱり、いわゆる男性的ではないかなー。これは。(沈黙) 母が割と、ぶりっ子ぽい感じのキャラなんですけど、そこを受け継いだのかな俺は。
- I: なるほ、お母様のぶりっ子のところを受け継いだのかもしれないと。
- A: うん、そうかなー。かなー。そういうセクシュアリティ的には、男性的というよりかは、女性的？しかも子どもより。
- I: 子どもより？
- A: なんかなー。なんかねー。あえて子どもっぽくふるまう、まあネタですけども、ちょこちょこありますし、うーん、幼稚なのかなー。
- I: なんか幼く感じるって感じなのですか？
- A: うーん、なんか、愛されたいだの、かわいいと言われて嬉しいだのっていうふしがあるから、そういうふう  
に、ふるまってしまっているところはあるのでしょう。それに普段からあんまり落ち着いた大人みたいにふるまおうっていうのはない。(笑う)のでね、精神的にはかといって、落ち着いた女性的なというわけではないし。
- I: 男女というより、子どもっぽいていうのが大きい感じですか？
- A: そうですね。うーん。そうかな？子どもっぽいか、ええ年やのになー。
- I: いやいや。
- A: でも、そうかもしれないなー。まあほんとにそんな子どもみたいにきやいきやいするわけじゃないですけど。(笑う)そうかな。それこそマスコットキャラみたいな。
- I: マスコットキャラ。
- A: 落ち着いてるわけでもないし、ちょっと子どもっぽい。
- I: マスコットキャラ。
- (中略)
- A: になりたい。みたいな立ち位置になりたい。入りたいのかな。
- I: マスコットキャラみたいな立ち位置といいますと？どんな立ち位置なのですか？
- A: いじられるのは少し違うのかな。でも、なんやろ、みんなが気にかけてくれるみたいな。うわー、言ってる嫌になってきた。

この語りでは、改めて「かまってちゃん」という性格とセクシュアリティとの関係について語られている。Aの「かまってちゃん」の性格は、母親の「ぶりっ子」を「受け継いだ」と語り、母親への同一化によって形成されたものと考えられる。そうした性格であるが、セクシュアリティとしては「女性的」であり「子どもより」と位置づけている。そして男女二元論の枠に自身のセクシュアリティがうまく位置づけられないことために、その



子どもっぽい有り様から、Aはジェンダー・アイデンティティを「マスコットキャラ」と意味付けている。

- I: なるほど。その、言ったことで肯定的な、こう、体験ができた人はもしかしたらその、オープンに言ってまわる人になるのかも知れないと。
- A: かもしれないけど、肯定的な結果ていうのがよくわからない。肯定的ってなんなん？実は俺もそっち興味あるんだよ、みたいな？それはねー、そのネタしたらあるけど。(笑う)後は、たぶんなんか、言ってしまうことで、なんか、このなんかな、女子力とか言われてはいるけど、できた自分のイメージがくずれそうなんがいやなのかな。やっぱり、なんていうん、八方美人と言うかええ恰好したい感じの人やから俺は、あんまり何ていうんか、マイナスになりかねないこと、わざわざ伝えたくはない。
- I: なるほど、マイナスになることを伝えたくはない。
- A: 自分はそれをマイナスやと思ってるから、そんなに深く考えてないんやけど、結局、好きなようにやってこうなってるわけやから、一般的に考えて絶対マイナスやと思うメリットがあることでもないと思うから、相手が迷惑かけるだけやと思うから、思うし、それやったら、自分が拒絶されたくないっていうのがあるんでしょけど、まあ、マイナスやと思うので、やからあんまりそこがずっと押し出したりはしたくないかな？やからそういう人たちはなんで、ようそんなことするなって思うのかもしれない。やから、こそ、それを完全に出してるオネエの人たちにはなりたくはないのかもしれない。うーん、難しいけど。
- I: 今の、マスコットの立ち位置にあるためには、そのゲイであることっていうのはマイナスの一面しか、ないと感じる、考えられるので、出す必要はないのかなと。で、だしてるオカマはマスコットというより…、でもまあキャラは立ちますけどね。
- (中略)
- A: それはなんとなく、あんまり、なんだろう、あのテンション無理やから…。(笑う)そこか？そこじゃないか、だから、なんかマスコットの着ぐるみは脱ぎたくないんですよ。
- I: ああ、着ぐるみを脱ぎたくない？
- A: まあ、やりたいようにやってるだけなんですけど、それでもね。例えば、やから、マスコットキャラでありつつ、僕は女子からしたら人畜無害のいい人なわけですよ。たぶんそれを言ってしまったら、なんていうんか、4年生になって、割といろんなことをしゃべりたくなって、なってるから、やからそういう話とか、女子にするでしょう、しゃべるようになったら。あの人はどうこうだよね、みたない。そういうなんか、なまなましい自分っていうのはいやかな。
- I: そのカミングアウトして、その人いいよねとか、そういうのを言うのが変だってことですか？
- A: なんかそういう…、そういう話するっていうのも嫌。そういう話する相手がいらないっていうのもあると思うんですけど、なんかそういう何ていうん、マスコットキャラでありいい人みたいなどころから出たくはないっていう。それもまあ八方美人的なあれかもしれないけど。
- I: そのゲイであるとか、そういうセクシュアリティをまあ相手に開示すると、そのマスコットキャラに、みんなが思うAさんというマスコットキャラクターのイメージが変わってしまう、可能性があるってことですか？
- A: うん。だから、まあ、僕は割とボディタッチが多い人なんですけど、まあさすがに女性にはあんまり、してって言われても嫌なんでしてないんですけど、じゃあ、よくしてる男子がそれを知ったとして、え、じゃあ、って思われたら、すごい嫌。そんなつもりでもないし。

ここではカミングアウトすることへの恐怖を、「マスコットの着ぐるみを脱ぎたくない」と語りなおしている。この語りから、異性愛者の中で、同性に向く性指向は隠すものであり、見られては自分のセクシュアリティに否定的なイメージを負いかねないものとして、Aさんがとらえていることが考えられる。そのため、愛されたいAさんは、ゲイである自身のセクシュアリティを「マスコットの着ぐるみ」で隠しているのであろうことが推察される。

以上のことから、愛されたい想いや自身を承認されたいという想いから、性指向がゲイであることが中身であり、その外側にかまってほしいという女性的であり子どものようなジェンダー・アイデンティティが皮として着せられている「マスコット」と、Aさんが自身のセクシュアリティを意味づけていることが考えられる。

#### ボディタッチ（第4回目の語り）

- I: 触りたいとか、接触したいとか、っていうのはどうしてですかって聞いたんですけど、やっぱり根源的なものなんですかねー。
- A: どうしてかー、欲求不満なんかなー。(笑う)
- (中略)
- I: どういう欲求なんですか？
- A: うーんと、うーんと、そんななんか、寂しいんかな。人肌恋しい的な。
- I: はあ、人肌恋しい。
- A: うーん、前とか、部屋に後輩来た時、一緒に金曜ロードショーをみとったけど。
- I: はい。
- A: なーんか、見とるのもあれやったから、のっかってたし。
- I: のっかってた？膝の上ですか？
- A: えーとね、こう座っとう上にこう。
- I: はいはいはい。
- (中略)
- A: 人肌恋しくてそうしちゃう。なんか、うん。なんだろう。うん。
- A: さー嫌じゃないならいいけど、それって結局性的欲求なんだろう？
- I: 別に安易に性的な欲求ってしなくてもいいと思いますが、どうですか？
- A: うーん、例えばその状況でチュー迫られたら100%するしね。
- I: ふんふん。
- A: もちろんしないけど。
- I: 相手がしてきたらってことなんですかね？
- A: (笑う)何を言っているんだ。
- I: 何かすごい曖昧なんかな。自分としては友達という壁があるんだけど、それをむこうから崩すって言い方はあれなんですけど、向こうからの、向こうがそれを取り払うんだったら、自分はそれを受け入れる、みたいな感じなんでしょうか？
- A: たぶん、取り払われるのを、ワンチャン[あわよくば]あったらいいなとは思ってる。(笑う)もちろん自分からしないけども、ワンチャンあったらいいよねーみたいな夢見がちなことを思いつつも、それが行動にでてるんがボディタッチなんかもしれへん。
- (中略)
- A: そういうことなんやろなー。正直。全然抑圧してないなー。
- I: 抑圧していない。
- A: 全然抑圧してないなー。
- I: しなきゃいけない感じはするんですか？
- A: 今のがまかり通るんやったら、かまわん。

ここではAさんが「かまってちゃん」として行っている「ボディタッチ」が、友愛と性愛の曖昧なニュアンスを含んでいることが語られた。Aさんは、ボディタッチを「人肌恋しい」という欲求を満たすために、異性愛者でも許される行為としてボディタッチを行いながらも、

同性愛的な行為への発展を期待している。Altoman(1993, 岡山・河口他(訳)(2010))によれば, ゲイのある特有の女らしさは同性愛者の集団内でよくみられるアイデンティティの主張の一つの形であり, 同性愛者が自己の生活をより広範な社会に統合することに向けて使用するとされる。こうしたAさんの女性的なボディタッチの行為の裏には, 異性愛者の友人という予防線を張りながらも, ゲイである自分を受け入れて欲しいという気持ちが隠されていることが考えられた。Aさんのセクシュアリティは, 中身であるゲイを周囲に受容してもらう為の無意識の受身的な実践の形態であり, そのことも含めた意味付けとして「マスコットキャラ」を選択していることが示唆された。また, Aさんは, そのセクシュアリティゆえに, 性欲と自己の受容を混合していることも考えられた。

【異性愛社会の中でのジェンダー・アイデンティティの意味づけ】

あくまで男性 (第3回目の語り)

- I: どういうところが違うんですかね?  
A: そんなお姉言葉使わんし、みたいな。(笑う)  
I: なるほど、なるほど。お姉言葉も使わないし。  
A: 別に化粧とかしたりしねえし、みたいな。別に女性になりたいわけちゃうし。  
I: なるほど、女性になりたくない感じ。  
A: 改めて、捉えなおすと女性的な面はあるやと思うんですけど、別に女性になりたいわけでもないから、みたいな。だから女装なんか興味ない。みたいな。感じかな。  
I: そうですね、お姉の場合は、女の子、自分の性別に違和感があつて。  
A: あの人の方々が、みんながみんな、そういうわけではないと思うんですけど。まあイメージとしてね。うん。  
I: 女子力があるんだけど、別に女性になりたいわけではない。  
A: あくまで男性ですよ。  
I: そのあくまで男性っていうのは、どういったところから、あくまで男性って言いきれるんですかね?  
A: ほう。うーんと、そりゃ、ほら、女性になりたいわけじゃないから。ってことかな。  
I: あー、はいはい。女性になりたくないから男性。自分は男性であるという確信があるということですね。  
A: あくまで男性です。  
I: あくまでっていうのは?  
A: 大前提、別に女性になりたいわけではない。  
I: なるほど、では男性になりたいな—という、言い方変なのですが、男性なのに、男性になりたいな—みたいな、指向性みたいなものがあるってことですか?  
A: うーんと、指向性というか、男性としてあらうとしているわけじゃなくて、まあ体的にも、いや男やし。別に女の人ではないっていうのがあるってだけかな。別に目指しているわけじゃなくて、普通に、やりたいようにやってるだけなんで。結局。別に何か、そういう、そこに反発心をもっているわけではないかなー。

I: なるほどなるほど。

A: まあ、変な話、たまに羨ましくなったりはしますけどね。

I: えっと、羨ましくなるというのは？

(中略)

A: それになんていうんか、やっぱりというか、当たり前にな数が多いでしょう。ああ、道行くカップルとかをみて、こうねえ、あれやね、男前とか歩いてたら、いいな一つて。変な話。羨ましいなって。だからまあ、別にうーんと、なんやろなー。そう思うぐらいで、だから女性になりたいというわけでもないし。あくまで、自分は男性として生まれてるから、男性として生きていく上で、性指向はちょっと違うねってだけの話で。うん、で、その性指向の違いがちょっと女性的っていう面に表れてるのかもしれない。けども、あくまで男なんで。

A: あくまで男性であると、まあその、ふるまいとかが第三者目線で女性で映ってしまうっていうところが、まあ普通のノーマルの男性に比べて多いと言えるのかもしれない。とは思うけど、自分としてはそんなつもりはないというか、女性になりたいというわけではないし、女性みたいにおもわれたいわけでもない。うん。どうなんやろ。

I: 第三者的な視点からすると、女性的な面と見られるかもしれないですけども、自分としてはそう思ってるつもりはないし。

A: そんなつもりで動いているわけでもない。後は、そうかな、生まれ変わったら、男か女かどっちがいいって質問がよくあるけど。

I: そうなんですか。

A: なんかあるじゃないですか？ そうですね。うん。なんか、あー違うか。どうそう、あでもやっぱり男の方がいいかな。

I: 男の方がいいかな。

A: 前も言ったかな、女の人とかを見てて、なりたいとは思わないけど、なんか、いいな、みたいな。普通にイチヤコウできるよね。いいな。って思うことはあるけど、まあこいつもいつか彼女を作って結婚するんやろなって思ったりして、ちょっと羨ましいなって思うところはあるけど、でも、やからって女性になりたいわけじゃなくて。じゃあ、生まれ変わって女性になりたいですかって言われると、なんか、そっちのいわゆる性的な面より、普通に女性として生きる上でのしんどい部分が目についてなりたいたわけでもないなっていうのを思ったり。

I: 生まれ変わったら、女性になるとするならば、女性としてのしんどさが目につく。

A: 別に性的な面ばかりを見ているわけじゃなくて。

I: 社会的な面ですか？

A: そう、社会的な面とか。うん。せやな政治的な面とかいろいろ。というのを考えると、やっぱり、まあ普通の男性というよりはちょっと女性に近い部分は自分の中にあるのかなーとも思うけども、まああくまで男性ですけども、みたいな。(笑う。)

ここでは A さんが自身のジェンダー・アイデンティティを「あくまで男性」と語っている。ここでは「あくまで」という言葉を“誤解のないように注意を促す”という意味で用いられている。つまり A の語る「あくまで男性」という言葉には、「性指向の違いが女性的な面にでている」ことがあるが、女性になりたいわけではないので、自分は男性であることを誤解しないで欲しいという意味

が込められていると考えられる。Altoman(1993, 岡山・河川他(訳)(2010))は、同性愛について考える場合、男性においては女っぽさ、女性においては男っぽさと同性愛を混同することがあまりに多いと述べている。また田中(2009)は、異性愛が自明である社会では、“異性愛”が男性というカテゴリーが含まれており、“同性愛”男性は存在自体が不可視化されていると述べている。つまり異性愛社会の中で、ゲイは、男性とカテゴライズされず、“オカマ”や“オネエ”という侮辱を含んだレッテルを張られしめがちなものである。そのため A さんのジェンダー・アイデンティティの意味づけでは、「あくまで」と自分が男性であることを誤解されないように断っているのである。A さんのこの意味づけからは、異性愛者のような当然のごとく“男性”でいられるのではない、ゲイである A さん独特のニュアンスが含まれていることが示唆された。

#### 肯定的なセクシュアリティ(第 5 回目の語り)

- I: なるほどなるほど。いろいろとあるけど、ありのままに生きてきたって感じなんですね。  
A: そうですね。  
I: そんな感じがしました。どうですか？  
A: でもまあ本間その通りです。家は別にかごどの親であつたわけでもないし、むしろほつたらかしの家やつたので、ほええんと、うん、普通に勉強してどっかいきたいとかあつたわけでもなく、普通にふあいーんと、生活したら、こうなつたつと。全体的にそうやと思う。  
I: なるほど。  
A: どうあがいてもこうなつたんじゃないかなつと。  
I: どうあがいてもこうなつた。  
A: そうなつたんじゃないんかな一つと。  
I: どうあがいてもっていう言葉は、諦めの意味合いのある言葉なんですけど、そんな意味合いを感じなかつたんですけど。  
A: 別にそれにたいしてあがいたつてわけでもないから、別にあきらめたわけでもないけど、まあいいやん別につて。いいじゃん別に。まあ、しゃーない、しゃーないつていうか、いわゆる普通につてわけでもないねんけど、なつてしまつたんだからいいじゃんみたい。なつてしまつたんだから、今更變わんねえよつて。

A さんは、自身の現在のセクシュアリティに対して誇りを持っているわけではないが、「どうあがいてもこうなつた」「しゃーない」と語るように、マジョリティになる

ことを諦めることによって，自分のセクシュアリティを受容していることが，推察された。Aさんは5回の語りの中で，「あんまり深く考えないので」と「自分の好きなようにしている」の言葉を繰り返し語っていた。Aさんは，マジョリティであることを諦めることで，だからこそ好きなように生きるというように，自身のセクシュアリティを肯定的に受け止めていることが，考えられた。

### 3.2 Bさんのナラティブ

Bさんは現在大学生の20代前半のゲイの方である。高校生までは、自身のセクシュアリティに違和感を持ちながらも、セクシュアリティを明確にすることはなく、大学1回生の後期に入り、LGBTサークルへの参加やアプリを通じたゲイの方との交流を通して、自身がゲイであることを自覚した。Bさんの3回の語りから得られた現実の年表を表6に示した。

表6 Bさんの語りから得られた「現実の年表」

*家族構成父, 母, 妹, 妹	
～18歳	小学校・中学校・高校: 性指向をあやふやにして過ごす。日々の中で、ジェンダー・アイデンティティのずれを感じる。
18歳～現在	X大学入学 ゲイであることを自覚する。 出会い系のアプリをゲイの人たちとの交友を始める。 一回生後期にLGBT系のサークルに所属。

全3回のデータを精読し、語りを継起順序に注意して構造的にまとめると以下の4つのテーマが見いだされた。

【セクシュアリティの受容】【ジェンダーのイメージに囚われないジェンダー・アイデンティティ】【社会イメージの中のジェンダー・アイデンティティ】【ジェンダー・アイデンティティと性指向の関係】の4つである。

## 【セクシュアリティの受容】

### 性指向への気付き（第1回目の語り）

- I まず最初にアバウトな質問になってしまうんですけど、ご自身のセクシュアリティに思うことにご自由にお話しいただけたらと思います。
- B 思うこと、難しい。
- I はい、思うことをご自由に。
- B ええ、なんやろ。そう思うこと。そんなに自分のことがってしんどいって今ところはなくて、まあそんなにそれで苦しんだとかもないんですけど、僕の場合は。
- I はいはい。
- B 最近、ただちよつと大学生になった、なったといっても今3年生なんでけっこう前なんですけど、まあなったのを境に同じような人と関わる機会が多くなって、よりいっそう強く意識してるかなって。今まではそんなに意識したことないんですけど、最近意識するようになったかなって感じですかね。
- I えーと、意識しだしたっていうのは。
- B えーと、あ、それこそ関わりだして、こっち[セクシュアル・マイノリティ]の人と。今までは気にしてこなかったんで、ひょっとしたら男の人が好きだとか、まあ女の子に興味があるだとか。僕、そんなに恋愛にあんまり興味ないのがあるかもしれないんですけど、そこを強く意識することはなかったんですけど、こっちの人と関わる回数が多くなったので、もちろんその人の話とか聞いたりとかするじゃないですか。聞いたりとかして、やっぱ自分もおんなじ感じやなって、で意識するのが強くなったって感じですかね。
- I そういう同じ感じの人っていうのはどういう経緯で出会われたんですか？
- B ええとですね。まあ、なんていうやろか、いろいろだと思います。具体的に言っているんですかね？まあいっか。まあアプリとかがありますよね。（中略）
- I このアプリとかBだとかも始めようと思ったきっかけは？
- B ああ。それはなんなんやろ。それ言われるとけっこう。始めたのは一年生の秋ごろなんですね。（中略）なんか唐突に始めたんですよ。あ、大学にもLGBTサークルみたいなのがあって、たぶんそこに入ったのもきっかけとしてあると思います。せつかく大学生なんで時間もあるし、うーん、なんか、今のまま、あやふやのままじゃないけど、そんな感じもどうなのかなって、始めてみたりとかしたら、いろんな人に会ったりもできるのかなって。始めましたかね。
- I なるほど、LGBTのサークルに入ったりですとか、大学生になって、あやふやのままじゃいけないーってわけじゃ
- B いけないっていうかー。
- I あやふやなものをクリアにしたいとか？
- B そうですね。高校生と大学生だと自由の幅が違うと思うんですね。大学生はすごい人もいるし、いろんな人がいるじゃないですか？っていうのもあるから、ある程度そういう活動してみてもいいのかなって。せつかくですかね。なんかやっぱり。

- I さきほどあやふやって言ってたんですけど、あやふやにぼかしてたのはいつ頃からなんですか？
- B あー。えっとですね、僕けっこう珍しいと思うんですけど、あんまり僕ちゃんとその恋愛のこととかを考えたことが無くて、で、すごい人をちゃんと好きになるっていうこともなかったんですね。だから、例えば、ゲイの人でも、小学校か中学校のときに男の子を好きになった経験があればはっきりするじゃないですか。僕は男の子が好きなんだっていう。僕はそういう、そういうはっきりと対象が男の子、女の子好きっていうのもなかったんですね。（中略）好きとは別に普通のことはかっこいいみたいな、芸能人見ているみたいにかっこいい、かわいいみたいな感じで、思ってるだけかなって、という思いで今までできてたんですね。だから、そういう感じで、あやふやな感じで、たぶん僕、ちっさいころからそんな感じであつたんで、もういつからあやふやなんって聞かれても、ちょっとわからないですけど、とりあえずそんな感じできました。で、自分的には男の子の方が好きなんだろうなってのがあったので、LGBTの人とかと関わったりとかして、やっぱりそうだったんだなって認識したって感じですかね。
- I でもそれ[なんとなく好き]も有名とかに向ける憧れとか…、どなか現実味の無い感じですかね？
- B そうなんですかねー。どうなんやろ。たぶん自分がそんなにはっきりさせたいとも思ってなかったんですね。楽しく過ごせたらいいなって感じだったんで、別に恋愛を楽しみたいとか、別にたぶん大きくなかったから、そんなに気にしなくてもよかったかなって感じですね。そのことを。
- I 大学生になってはっきりさせたいって気持ちが大きくなっていったんですかね？自由度が上がったからともおっしゃっていましたが？そういうわけでもなく？



B ああ、やっぱり、自由度が上がったのがあって、(中略)やっぱり、高校生までやとけっこう偏見とかあるんじゃないかなって僕は思うんで、大学生だったと偏見とかあるかもしれないけど、ある程度下がってくると思うんですね。受け入れてくれる人も多くなってくると思うんで。ていうのもあったから、まあせっかくなし、その二つの理由があったからですかね、ていうので大学生からですね。

ここでは B さんが、小学校から高校まで「あやふや」であった自身の性指向が、大学に入って男性に向くことが認識されたことが語られた。宮腰(2008)は、LGB が自身のセクシュアリティの受容の困難への対処法として、“時熟”を挙げている。B さんは、自身の好きという気持ちを、「芸能人見てるみたい」なときに思う気持ちとして受け止めており、どこか性指向が向く感じを「あやふや」にしている。そうすることで B さんは、自身の性指向が男性に向くことを保留し、直面化してマイノリティというセクシュアリティの受容の危機(宮腰, 2008)を解消していることが考えられる。

また小学校から高校までの学校教育では、授業内容や制服などから、ホモフォビアを生産している環境である(眞野, 2014)。B さんは、高校まで「けっこう偏見ありそう」と語っているように、自身の性指向が受け入れられない環境下にいることを感じ取り、セクシュアリティが受け入れられるだろう大学で、性指向を認識し、肯定的に受容することができたと考えられる。

#### セクシュアリティの受容 (第 1 回目の語り)

I 今聞かれて、思い出すものありますか？

B そうですねパッと思い出すのは、人の話だから細かく言えないんですけど。

I はい、構いません。

B なんか、あの、トランスジェンダーの方が結構いらしゃるんですけど、トランスジェンダーの方で、(中略)体を変えたい人もいると思うんですけど。その体を変えたい人が話してはったときに、すごいご両親と喧嘩をなさったと、手術をするのがどうかどうのこうのとか、なんかそれをきっかけに親のことは金づるじゃないけど、お金を出してくれる人とか私は思っていないという人がおりはって。(中略)なんか、ね、ご両親の理解が得られないとかもちろんあると思うんですけど、あ、自分の両親をそんなふうには見れないようなことがあるんやなって思って、そこは家族に対する考え方とかはなんかびっくりしました。その人の話。

I 家族の考え方ですか？

B そうですね、はい。家族に対する考え方ですね。必ずしも理解してくれる人ばかりじゃないねんって思いました。こっち[セクシュアル・マイノリティ]に関わっていると、もちろん自分たちは自分のことを受け入れられるじゃないですか？そういうのを。何ていうんだろう、私はゲイです、とか言われても、別に僕はそれを全然拒絶とかはしないじゃないですか、もちろんわかるので。でも、当たり前の人たちと話していたので、LGBTのサークルとかで、だからその感覚が当たり前だと思ってたから、そのご両親とあったっていうのを聞くと、やっぱ受け入れてくれない人も、家族でもいるんやなっていうのが、すごい衝撃的というか。やっぱ受け入れて、昔より受け入れてくれる社会になったからといって、そう安全なものじゃないんやなって思いましたね。

I なるほど、なるほど。聞いてて思ったんですけど、Bさん自身は自分がゲイだと自覚してから受け入れられてもらえるっていう漠然とした感じはあったんですか？

B なんか、そうですね、うーん。多くの人に受け入れてもらえるとは思わないんですけど、なんやろ受け入れてもらえる感覚になったというか、そういうのを受け入れてくれる人たちと関わったから、そこに慣れたというか、たぶん。感覚として。だから当然受け入れてくれる人たち関わっている中での話やったので、そっか、今まで、環境に慣れてたけど、そっか自分、改めて考えて、受け入れてもらえないこともあるんやなって立ち返った感じですね。あ、ちやうかったわっていう、再認識したって感じですね。別に世間はみんな受け入れてくれるわけじゃないぞっていう。

I 他に何かありますか？

B 他ですか？(中略)話を聞いて勉強になったとは思わないんですけど、もちろん、さっきも言ったように、自分たちは当事者なので、そういう人たちを受け入れられる心意気はあるじゃないですか？まあ、その話とかしてるときに、例えばですね結婚とかの話になったときですね。(中略)男同士で結婚して、女同士で結婚したことによって他の人に与えるデメリットとか別に無いやんな、結婚してもいいやんな、みたいな話があったんですね。あつて、なんでこんな受け入れてくれへんねん、世間は！みたいな話をするわけじゃないですか。(中略)それを聞いてた時に、何もないからいいやんと受け入れて欲しいと思うけど、向こうの人からしたら僕たちのことわからないんやから、簡単に受け入れられないのは仕方ないのかなって思いましたね。なんかそれを思いました。説明がっやこしいですけど。

I あ、いえいえ。まあ確かに。ストレートの人ですよ。ストレートの方が好きになる気持ちにはこちらのセクシュアルマイノリティの方もわからないし、逆もしかりだから。

B そうです、こっちが一方的にいつてなんでやねん、なんでやん、いうのもおかしい話なのかな？というふうに思う。

I ではお互いが知ればいいっていう話なんですかね。

B そうです。最終はそうなればいーなと。

I なるほど、こちらの質問になるんですけど、SNSとかを利用し始めて、自分のセクシュアリティが変わったとか、影響したなっていうのはありますか？

B ああ。そうですね。うーん。

I 区切りがったということは後に何かあったのかなと。

B そうですね、どうなんやろ。やから、小学校中学校みたいな、女の子男の子どっちが好きみたいな迷いはなくなって、後はなくなって、なんやろ。あー、なんか、変わったこと。なんやろ。

(中略)

I 迷いがなくなって言うのは具体的には、っていうか詳しく教えていただいてもいいですか？

B えーとね、なんやろ、難しい。何ていったらいいやろ…。

I 時間は全然あるので。

B はい、なんやろ。迷いがなくなる…。うーん。ああでも、自分の気持ちに素直になるっていうのは、自分の気持ちに素直になるっていうのはかっこよすぎるな。なんかな。それこそ男の子かっこいいとか思っても、今までやったら、ストレートの人が普通な社会なんで、まだ日本は、と思うので、あ、でもこれはちやうのかなって、この気持ちは違うのかもしれないって思うところもあったんですけど、もう今はそんなことは思わないです。あ、もうこの人好きやったら好きやしてみたいな。別に女の子に興味ないっていうなら、興味ないってなるし、なんか気持ちに素直になるっていうのはあったのかなって思ったりしますね。

I 自分の気持ちに素直になる、なんだろう理性が働くっていうと違うと思うんですけど、世間体？社会との比較がなくなったって感じなんですかね。

B そう、社会に無理して、そうですね、ストレートが普通である社会に合わせる必要はないっていうか、だからっていろんな人に自分はゲイですって言うってわけじゃないんですけど、そういうことじゃないですけど、自分の気持ちとして、社会がストレートじゃないといけないからといって、自分もストレートじゃないといけないっていう考えはない。なくなりましたかね。そこに合わせなくてもいい。  
I なるほどなるほど。社会はこうだけど、僕はこうしたいんだって気持ちに素直になれたって感じなんですね。  
B そうですね。

ここの語りからは、Bさんが自身の性指向を受容し、アイデンティティに統合されていることが推察される。石丸(2008)のマイノリティ集団としてのアイデンティティの形成モデルの最終段階として、“自己受容・安定したグループ観”を挙げている。この段階では、マイノリティ集団のメンバーとしての自分を肯定的に受け入れ誇りを持っている状態であり、マイノリティの文化とマジョリティの文化とのどちらにも肩入れすることなく、バランスのとれた見方ができるとされている。またCass(1984)のゲイ・レズビアン性のアイデンティティ形成モデルの最終段階の“アイデンティティの統合”では、世の中を「よい同性愛者」と「悪い異性愛者」の2つに分けて考える2分法的な考えは正しくないと気づくとされている。Bさんは、トランスジェンダーの方の話を聞いて、自身がLGBTサークル内での受容される感覚が当たり前ではないことに「衝撃的」に気付かされたと言った。Bさんの当たり前ではない気づきは、Bさんがサークル内でゲイとして受容され、自身を肯定的に受け止めていることが推察される。そのことは「ストレート(異性愛者)に合わせる必要もない」の語りに見られるように、異性愛社会の中で、自分が自分らしくいてもいいと、肯定的に性指向を受け止めていることからわかる。またサークル内での議論の語りでは、ほかのメンバーが社会にセクシュアリティを受け入れられないことに怒りを感じている中でBさんは、自身が異性愛者の性指向を理解し得ないことから、異性愛者に必ずしも受け止められないことを理解し許容していることが窺える。このこと

から、Bさんが自身のセクシュアリティをアイデンティティにしっかりと統合していることが考えられた。

## 【イメージに囚われないジェンダー・アイデンティティ】

### ジェンダーのイメージへの嫌悪感（第2回目の語り）

B: 僕はあんまり男の人のイメージ、女の人こういうイメージみたいなんはあんまり好きじゃなくて。例えばでいうなら、男の人はこういう仕事をして、とか、しっかりしていないとか、強くないといけなくて、感じで、女の方は、その家のこととかをしますみたいな。弱いとか、弱いて言い方、失礼かもしれないですけど、なんかやっぱりイメージ的に、男の人よりも、何ていうのかな、弱い立場っていうんじゃないんですけど、うーん、男の人が女の人を守るっていうイメージがあると思うんですけど、僕はそういうイメージって好きじゃなくて（中略）また話が飛ぶかもしれないんですけど、自分が心理学という、臨床心理学という、心の病気とかの勉強とかしてるんで、それをしてるっていうのも関係してると思うんですけど、やっぱりなんかその、男性は強くあらなくていいとか、弱音を吐いちゃいけないイメージがまだあるなって思って、こう泣いちゃいけないって、こういうのが僕はすごく僕はいやで、その何ていうの、男の人やからっていうのが僕はすごく嫌なんです。だからそういう勉強しているのもあって、そういうしんどい人を見るような勉強を将来につなげてしているわけなんで、あの、無理とか、男の人はこうじゃないといけない我慢している人とか、ていうのを見たり聞いたりすると、なんかすごい、なにそんなに強くあらなくていいんでもいいんですよって思うんですね。だから、そこはなんか男の人はなんかちゃんととかなないといけないイメージがすごい嫌なので、そこはすごい嫌悪してるってとこですかね。後、そうですね。男の人ってイメージはそんなとこですかね、（中略）ジェンダーっていう考え方が、男らしさ女らしさみたいな、やつはすごい僕はいやで、そこはなんていうか嫌ですね。否定的ですね。こうはもう嫌ですね。難しいって思うんですけど、なかなかイメージがやっぱり普通の生活をしている中で、男の子なんだからとか、女の子なんだからとか、その自分も言っちゃうとかあるんですね、やっぱり。

I: そうなんですか？

B: 極力言わないようにしてるんですけど、妹がいるんで、やつばなんていうのか、すごいなんていうんやろ、もうちょっと女らしくいやとかしちゃうときとかあるんですけど、言わない方がいいって思うんですけど、やっぱり言っちゃうところもあるから、自分も。だからなかなかイメージの払しょくって難しいかなって思うんですけど、うーん、やつばそこはいや、いつも普通に生活してて聞くと嫌だなすごい思いますから、そこは男女じゃなくて、その人として見て欲しいなって思いますかね。ジェンダーって聞かれます。なるほど男の子やからじゃなくて、その人感じて見て欲しいなってすごい思いますね。

I: なるほど、ジェンダーのイメージですかね、それが嫌やな。

B: そうですね、ジェンダーっていう意味の捉え方が、僕はあれなのかなと思うんですけど。

I: いやいや。

B: 男らしさ女らしさっていうニュアンスが含まれてるのかなって感じるの、そこはすごい嫌ですね。男女と別れてる分には全然いいんですけど。だから男らしさ、女らしさっていうのは嫌です。

I: どうして、そういうところが嫌いなんですか？

B: ええなんなんですかね？自分も言われてきたのもあるし、言われてきて、え、何で？みたいに思ってたんですけど、まあしゃーなし、社会ってこんなかんじやからって言われるのも仕方ないのかな？って思ったんです、思ったり思うんです。成長するに考え方も変わってくと思うんですけど、視野が広がってくると、嫌なんで、そんなダメなんやろとか、うーん、なんかなんで、そうですね、言われてきたのも嫌だったし、言ってる人を見て嫌だし、何ていうんですかね…。やっぱり男女でうーん、なんか性格を決めて欲しくないというか、うーん、そうですね、何ていうのかな、なんなのかな…。そうですね、やつば自分が言われてきたのが嫌だったのが大きいのかな？そっからそのその感じで、社会を見たら、やつば言われてる人もおるし、同じしんどい、なんでこんな言われなくちゃいけないんだろうかって思うし、そうですね、難しいな、そんな感じなんですけど。

I: そのじゃあ、小さいときって嫌やなって思ってる中で、体験はありますか？こういう時にこう言われてみたいがあれば、思い出せるものの中で。

- B: うーん、でもやっぱり、自分の特に強いエピソードがあるわけじゃないんですけど、こうなんか体験的に、自分がけっこう男らしくない、しっかりしていないなよなよしている感じなので、やっぱりそう男らしいというイメージをもってるお母さんからすると、もっとシャキッとしないとか、言われるのが、それがすごい、しなきゃ、人としてしなきゃダメなのがそういうふうと思うんですけど、男やからしなさい、とかは言われると、なんか、何回か言われたりとかして、それはすごいやっぱり嫌やったし、その何ていうのかな、小学校とかの集団生活とかとなるじゃないですか、他の男の子もいるわけじゃないですか、で、その他の男の子とか見た時とかに(中略)例えば外で遊ぶとか、活発な感じなんですね。僕は、そういう感じじゃなくて、内になかで感じなんで、そういう人とかをみたときにやっぱり、こういうもんなんだな、男の子はみたいと思うんですけど、でもやっぱり、女の子の中で遊んでる方が僕は多かったんで僕は。そこでなんか、何ていうんやろ、うーんやっぱあると思うんですけど、男らしさ女らしさ、男の子っぽい女の子っぽい、みたいなんはあるんですけど、それはそこまでは気にしては無かったんですけど、まあ、あんまり気にしなかった、とは思うんですけど、うーん、どうなのかな？何っていうんですっけ？質問なんでしたっけ？ごめんなさい。
- I: いやいや。今で良かったんですけど、具体的な体験を。
- B: 具体的な体験でしたね。
- I: でも、男の子の活発さを、男のイメージの、その粹に…。
- B: そうですそうです。自分はなんか違くて、あ、なんか違うのかなって思いましたかね。  
(中略)
- I: 違うっていうとか異なる部分があるって感じなのでしょうかね？
- B: そうですね。やし、やっぱ、違うのかなとか、え、なんやろ…。うーん。なんか、なんか、あ違うってのもありましたし、見ててこうやっぱ、ここの子たちが遊んでいるのを見てると、なんか、何ていうのかな、自分もこう遊べて楽しめるような、子がよかったかなってちょっと思いました。なんていうか、たぶん、頑張ってその子たちの中に入りこいってたとたぶん、根から楽しんでいるわけではないと思えますので、その子たちは外で遊ぶの大好き—って育ってきてる子たちやから、自分だけそう思って生きてきてるわけじゃないので、たぶん一緒に遊んだとしても、たぶん楽しいかもしれないのだけれども、こうなんていうのだろう、本当に楽しんでいるのか定かじゃないっていうか、自分は普段から休み時間でも中で過ごすことを選んでるってことは、中で過ごす方が自分にはいいと思っているからだと思うからだと思うので、たぶんそこに自分を合わせるのは、していこうとしてもそんなに心から楽しめな  
いと思うんですよ。だから、そうじゃなくてこう自分もそう楽しいなって思えるような子に育ってこれたら、この子たちと遊べたのかなっていうのはあったのかもしれないですね。なんていうんか、憧れ  
でもないんですけど、自分もこんなふうに遊んで楽しめるような感じでこればよかったなって思った  
かもしれないです。

ここでは、「男性はつよくあらないといけない」「弱音を吐いちゃいけない」などのジェンダーのイメージに自他ともに縛られることや、性別によって性格を決めつけられることに、Bさんが嫌悪していることが読み取れた。O'Neil, Helms, Gable, David, & Wrightsaman(1986)は、男性役割葛藤という概念を用いて、男性役割が個人の潜在力を制限してしまうことを示唆している。このように、男性役割のイメージは時に個人に不利益を生じさせることがあり、Bさんはこの男性役割葛藤を生じさせるジェンダーのイメージを、自身の体験や周囲の人々の観察から、忌避していることが考えられる。

こうしたジェンダー・イメージへの嫌悪感の背景には、男らしくないBさんに母親から男性役割を押し付けられ

て「嫌やった」経験や小学校の集団生活内での周りの男の子との違いがあった経験があることが語られた。周囲の男の子たちの遊びを「心から楽しめない」と語られているように、Bさんは、自身のジェンダー・アイデンティティが周囲の男の子たちと違うことを実感していたことがわかる。そして楽しんでいる男の子集団に「憧れる」という語りには、そうした男の子になりたくてもなれない悲しみがあるように窺え、そうしたBさんにとって「男らしさ」のイメージをあてはめることは嫌悪感が起きて不思議ではないことであると考えられる。

そうした体験から、Bさんは、「男女じゃなくて、その人として見て欲しい」と語っている。そこには男女の枠ではなく個人として捉えて欲しいという、男性のイメージによって嫌悪感を覚えるBさんの強い想いが読み取れた。

#### ジェンダー・アイデンティティの受容（第2回目の語り）

- I: 囚われなくてもいいんやなって思えるようになったきっかけとか、そういう出来事みたいなのがあるのかなーと、まあじわじわとっていうのもあるし、こういう情報を知れたからっていうのもあると思うんですけど。
- B: そうですね(中略)自分が広がると同時に、周りの子たちも成長するから、周りの子たちも視野が広がるじゃないですか？例えば、このときはなよなよしてたのを、気持ち悪いっていうふうに考えてた子も成長していろいろ知れたら、そういう子もいるんやなって思えるじゃないですか。だからその子は、なよなよする子は気持ち悪いって考え方がもしかしたらなくなって、別にこういう子もいるんやなって思えるじゃないですか？だから自分も視野が広がったし、周りの子たちも一緒に広がっていくんで、こういう自分はもう受け入れてもらいやすくなるっていうのが、あると思うんですね。みんなも成長するからっていうのが、今、それこそ大学やったら、もうそんなたぶん、濃くそういうこと言う子にあったことないんですけど、男だからなよなよするなよっていうのが、わ、あったことないんで、そういう子は、たぶんみんなの許容量の範囲も広がってくるから、今まで見たいに、みんなが男やねんから男らしくに合わせなきゃって意識も特になくなって。みんなが受け入れてくれるから、別にそんなこと言わなくてもいいんだって思えるようになったって感じですね。周りも成長してるのもって言うのもあるし。後は、そんなうーん、周りの影響が大きいって感じがしますね。自分もちろんやし、まわりの子たちもやし。
- I: なんか、周りの子たちが多様性を受け入れるって感じ、なんか男イメージやったらこれじゃなくて、いろいろいてもいいんだなって受け入れることができる人たちが増えてきたってことなんですかね？
- B: かなって、そういうふうには思いますかね。

- I: なんか実感したって感じがするんですね。
- B: 何ていうのかな、あまり、あの、なんか、スゴイ極端な話なんですけど。テレビとか見てて、例えばニューハーフタレントとか出るじゃないですか、そういう方とか、すごい昔はこうなんていうだろうか、つらい思いを下とか、こういう感じやからいじられていじめを受けてたとか、それはすごい極端な話なんかもしれないんですけど、まあ何かしらみんなつらい思いをしてきてるみたいなのを聞いた時に、まあ自分もちよっとそのあったり、ちよっとしたこと、気持ち悪いことがあったんですけど、そういう話とかを聞くと、自分は、そこまでつらい思いをしてないって思うんですね。今まで、小学校もそうやし、中学高校もしんどくなるような思いないから、すごいそういう意味ではすごい周りの子たちがよかったのかなって、すごい思うんですね。例えば、小学校とか、だと自分の学年だと、一学年はスゴいやんちゃな子が多いとか、1こ上はすごいこうきつい子が多いとか聞いた時に、自分の学年、自分の同い年の子たちは、あんまりなくて結構優しい子たちばかりだったなって、それは中学高校と一緒に、けっこうみんな優しい子ばかりしやつたって思うから、なんか自分の子たちが許容できる子たちが多いっていうか、自分を受け入れてくれそうな子たちが多い学年、ていうか年に入れたのかなってすごい思うんですよ。だから、そういう面では、僕は周りの人たち、環境が良かったのかなってすごい思うんですね。何の話だったか忘れちゃいました、ごめんなさい。
- I: 全然大丈夫すよ。話しているんあ方向に行くもんなので。僕が後で聞きなおして、それでその考えていくので。
- B: それでですね、周りの環境に恵まれてたのかなって自分は思います。
- I: そうなんですか。つまりその、タレントの誰かそのつらい体験と比較して、自分はあんまりつらい体験をしていないので、周りがいいのかなって思うんですね。
- B: そうですね、そうなのかな一つ。そんなことする人おったんやってびっくりするんで、あ、でもおるのはおるってことなので、自分はそういう子おらんくてよかったのかな一つというふうに思うって感じですかね。

ここでは、ジェンダーに受容的な環境によって、「男らしさ」のイメージに囚われることがなくなり、自身の「男らしくない」ジェンダー・アイデンティティを肯定的に受容できたことが語られている。Slaby & Frey (1975) のジェンダー・アイデンティティの認知発達段階によると、人のジェンダー・アイデンティティは、①性別ラベリングの習得、②性別安定性の習得、③性別恒常性の習得、の順に発達するとされている。性別恒常性の習得によって人は、表面的な特徴が変わっても性別は変わらないことを理解することができ、ジェンダーのステレオタイプの信念の硬直性が和らぐとされている。この第2段階の会得が6歳とされており、Bさんの語り中の時間軸とちょうど一致する。つまり、周囲の子どもたちがジェンダー・アイデンティティの認知が第2段階に到達したことによって、Bさんは、周囲に許容されている感覚を受けられるようになり、自身のジェンダー・アイデンティティを肯定的に捉えることができるようになったことが考

えられる。また、テレビ番組のニューハーフタレントと自分を比較している語りからは、Bさんは、ニューハーフタレントのいじめ体験から、自身もいじめられても不思議ではないと認識することで、自分がいじめられていないことを、受容されている環境と受け取り、周囲からの受容感や自己肯定感を強くしていることが考えられる。

### ジェンダーのイメージと自己（第2回目の語り）

I: 男性のイメージに沿わない自分をどう思うのか？

B: 生き方とか考え方とかですね。(中略) やっぱ、後はどうなんやろう。あんまり自分ことについて考えたことがないんですね。人のことかはスゴイ思うんですけど、じゃあ自分はどうやねんって言われると、なんかどうなんやろう？どう生きてるんやろ。なあなあで生きているで。人にはすごい言うんですけど、自分はなあなあやからな。うーん、難しいな、そうですね、なんやろ自分は、自分な一、ふーん。はっきり答えが出ないんですね。質問に関する答えが出ないですね。

I: 別にじっくり考えてもらいたいんですし、もう無理だなんて思ったら。

B: ちょっとおいてもらってもいいですか。

I: そう考えていくとジェンダーというか性別の枠がなくなればいいなって感じなんですかね？

B: そうですね…(中略) 男女っていう生物学的な性は存在するからいいんですけど、(中略) なんかジェンダーっていう考え方にはやっぱ男らしさ女らしさみたいなのが含まれているかなって思うから、うーん、なんかそうやな、まあ、なくなればいいの…じゃないですけど、自分は極力囚われたくないなって感じですかね。もう社会にあるのは、別にいいので、自分はその、囚われたくなくて、そういうので、自分をなんか聞き方とかが狭くなるのは嫌やし、周りの人をジェンダー意識で見ると嫌やし、自分の世界っていうか、自分が生きていく中では、極力重要視しなくてもいいかなって、いうかいらな  
いかなって感じに思っているというか。はい。

(中略)

I: なんか、そのジェンダー・アイデンティティ、まあジェンダー、ジェンダー・アイデンティティだとすると、男と女もありますし、男でも女でもないっていう認識もありますし、いろいろあると思うんですけど。そう考えてみると、あんまり枠が固定化されていること自体がよくない感じがするのかな？

B: うーん、固定化、あ？

I: すいません、悩ませちゃって。

B: 全然、全然。なんかややこしい。固定化、固定化。考え方の問題だと思うんですけど、固定化されてることに囚われなくてもいいふうに思う。別にされててもいいんですけど。それに囚われてる生き方、それに沿う生き方、その枠に沿う生き方はしなくてもいいかなって思いますかね。多少、影響受ける分にはいいと思うんですけど、それに、沿ってこう、何ていうのかな、男女イメージに沿って生きる、生き方はすごい嫌だなんて思うんで、その枠があることは別にいいんですね。そういうのがあって、それを基に自認をする人もいるわけやから、別にあってもいいけど、だからってそれを基準に、元のベースにおいて生きる必要はないのかなって思うから、ジェンダーの枠組み自体があることに関してはいい  
ですかね。後はそれをもう人がどうとらえるかだと思いますので、うーん、それは別にいいのかなって思いますけど、枠組みされてても、いいかなって思うんですけど、うーん、そうですね。枠組みはあってもいいかなって思います。



I: 今、その、その男のイメージと女のイメージに沿わなくてもいいとおっしゃてたんですけども、沿わないBさんは、極論、どんな人なのかなと。社会的なイメージはあって、それに離れるっていうのはちがうんですけど、イメージに囚われたくない自分はどのような自分なのかなって。

B: なるほど。

I: ちょっと気になりました。

B: 今は囚われたくないけど、囚われてる状態と思うので、さっきも言ったように男の子はこうしなくちゃいけないとか、イメージはもってるにはもってるから、うーん、そのイメージから、こう、脱却じゃないんですけど、さっきも言ったんですけど、そのイメージにそのような生き方をしなくていいと思うのと一緒に、イメージに今は沿っちゃってると思うから、そういう生き方じゃないとだめかなって、思ってるところがあるから、そうじゃなくてもいいよってこう、何ていうんやろシフトチェンジじゃないんですけど、そうじゃなくてもいいんだと、もうちょっと自由に生きれたらいいかなと、こうルールからこう、外れるか外れないかのあやふやな状態だと思います。だから囚われてるといったら囚われてると思います。今もまだ。囚われたくはないけど、囚われてる自分がいると思いますかね。

これらの語りから、ジェンダーのイメージを抜け出そうとする中で、ジェンダー・アイデンティティが何なのか答えが出せない状態にBさんがいることが推察された。Bさんは、自身のジェンダー・アイデンティティを統合する上で、社会のジェンダーの「イメージ」から囚われない生き方を選択しており、自身を「ルールから、外れるか外れないのかあやふやな状態」語っている。Bさんのこの「あやふやな状態」は、宮腰(2008)が述べる、セクシュアリティを受容する上での困難の対処法である“時熟”の状態にすることが考えられる。語りの中で、「自分のことは考えたことがないんですよ」と語っていることから、自身のジェンダー・アイデンティティを保留にしていたことが推察される。Bさんは、ジェンダーの「イメージ」に沿わないように生きる中で、自身のジェンダー・アイデンティティを、今まさに模索している段階にあることが考えられる。

〈社会イメージの中のジェンダー・アイデンティティ〉

自己のジェンダー・アイデンティティと

社会イメージとのずれ（第3回目の語り）

- I: 今度はご自身のジェンダーについて思うことを自由にお話しいただいてもいいですか？また抽象的で、難しい質問になるのですが。
- B: そうやなー、どうやろー、うーん。そうですね、なんだろう、難しいな、自分のですね。なんか特に今自分のジェンダーの一致とかの話とかなら違和感はなく、ただ同じことになっちゃうと思うんですけど、男やからこういう風なイメージとかに周りから受けてくる中で、やっぱり自分はそれにはあてはま、そのイメージとは違うのかな、とかはけっこう感じて。なんていうのかな、うーん、自分的には自分の、なんていうの、世間一般の人の男のイメージには、イメージっていうのかな、男の人ってこういう感じ、こういうことするよねとか、こういう考え方だよねとか、こういう生き方の中にはけっこう自分はあてはまらないのかな、ていうのにはすごい思うので、なんていうんやろ、そうですねー、難しいな。なんていうんやろ、別に自分が男性であることに疑問は持たないんですけど、なんかそういうズレを感じるから、なんていうのかな、ちょっと違うのかな人とはふうには思うんですけど、だから、なんていうんやろ、なんて言ったらいいのかな、うーん、なんかこう、こう自分が男の子ですみたいなのをこうはっきり言えるかというそうではないというか。もちろん体的にはそうやし、普通にそう別に全然あれなんですけど、こう、僕は男の子です、みたいなばって断言できるような、自分はジェンダーでいうと、ジェンダーでいうところの男ではないのかなっていうふうには思っていますかね。自分のジェンダーというところをいうと。
- I: 自分が男性であることに違和感みたいなものは感じないけど、まあでも世間のイメージと比べてしまくと、なんか違う点がある感じなので、世間と比べると、自分が男だーとははっきりとは言えない。
- B: そうですね。
- I: ちょっと点点点みみたいな感じなんですね。
- B: そうですね。すごい形容できないんですけど。なんていうか。女の子とか、自分が女の子の心をもってるとかそういうことではないんですけど、なんていうんやろ、難しい、すごい形容が難しい。その境目でもややとするようながあるのかなって感じます。
- I: 自分が女の子になりたい、トランスジェンダーではないんだけど…。
- B: そうですね。そういうわけじゃないんだけど、なんかちょっと。難しいですね。

ここでは、身体的性別が男であることから、自身のジェンダー・アイデンティティを男性と認知しているが、自己のジェンダー・アイデンティティが他者の思うジェンダーのイメージと一致しないと感じていることから、自身を男性と断言できないことが語られた。佐々木・尾崎（2007）は、ジェンダー・アイデンティティの下位概念のとして、自己の性別が社会つながりをもてているという感覚について“社会現実的性同一性”と定義している。Bさんは自分が社会規範としての男らしさに当てはまらないことから、この“社会現実的同一性”の感覚が乏しくなっていることが考えられる。また「境目でもやや」と語っているように、“社会現実的性同一性”の感

覚が乏しいことから、Bさんは社会の中での自己の性同一性をうまく定義できなくなっていることが推察された。そのため、身体的性別から、自身を男性と自認している一方で、男性と断定することができず男性と女性の「境目でもやもや」したジェンダー・アイデンティティの認識になっていると考えられる。

- I: それではさっきの発言について一つずつ質問していきたいんですけど。えーと、世間の人イメージにあてはまらないなっておっしゃってたんですけど、その点をもう少し詳しく教えていただいてもいいですか？この点が特にとか。
- B: そうですね。うーん、なんていうんやろ、一番思うのは、男の人は活発ってイメージなんですよ。(中略)例えば普通に遊んでいるときでもいいしご飯を食べてるときでもいいんですけど、女の方は楽しんでるけど、礼儀正しくないんですけど、おとなしくじゃないんですけど、なんていうの、つつましかじゃないんですけど、人の目を気にしてこう、ずっと、礼儀正しくないんですけど、してるイメージなんです。で、男の子はすごい擬音なんですけど、イエーイみたいな、はっちゃけるイメージ、ほんまにはっちゃけてる、にぎやかな、そんなに他人の目を気にせずにご飯ときもわいわいわみたいなイメージなんです、僕はすごい。なんですけど、自分はあんまりそういうのが、若干じゃなく、こう女性的な感じで、気になるというか、周りの感じとか、見られ方とかがけっこう気になるんで、なんかそういう、にぎやかにわいわいわいしてるそういう感じは、楽しいんやろと思うんですけど、あんま自分にはできないんですね。そういうのは。とか、やっぱそういうの見てると、なんかこういう感じが男の子の感じなんかになってすごい思うから、そこで自分はやっぱこう人のなんか行儀よくしてるなっていうのを感じるんですね。なんやろ、難しい。
- I: 活発さとか、オープンにはっちゃけられるっていうのは男性特有な感じが。
- B: 僕はそういうイメージがあって。もちろん女の方はいると思うんですけど、なんとなく典型的なイメージで考えると、ステレオタイプな考え方もかもしれないんですけど、そういうのとは自分は違うんやろなと思うし、後なんやろな、そんな感じかな。
- (中略)
- B: そういうところで感じるんですよ。他はそんなに、あんまりかな。今のところ…、やっぱそこから、結局活発さオープンさみたいなのが派生して、どんどん具体例に飛んでいく感じなんで、中心的なところはそこですね、男の子ははっちゃけてる。
- (中略)
- B: 今までの、それこそ、そうやなどうなのかな、ほんまに小学生中学生高校生のときとかのほんまに休み時間の光景とか、体育祭の様子とかを、ほんま日常を見てたらやっぱ、外で遊ぶ＝活発とか、外で遊ぶ＝じゃないかもしれないんですけど、外で遊んでる感じとか、その体育祭の感じを見てたらやっぱ、うーん、なんていうんやろ、上限が、上限が違うのかな。男の子の方が盛り上がるの上限が大きいのかな、女の子も盛り上がるけど、男の子の方が上限が上なイメージで、(中略)やっぱ男子の方がわーわーしてるイメージが僕はすごい受けるので、ほんまそういう微妙なところ、些細なところなんですけど、やっぱ男の子って、わちゃわちゃしてるっていうか、わいわいしてるっていうか、あ、自分はちょっと違うのかなっていうふうに思うって感じですかね。

Bさんは社会イメージとのずれとして、男性の「はっちゃけ」具合をあげており、「はっちゃけ」ている男性集団の中で自身がそれに合わせられないことから、男性のジェンダーのイメージと自分との違いを感じていることが読み取れた。Bさんにとって、男性集団に馴染めない

ことが、社会集団と自分の性別の違いを強く意識させてしまい、“社会現実的同一性(佐々木・尾崎, 2007)”を弱めてしまっていることが、考えられる。

自己のジェンダーとしての有り様 (第3回目の語り)

- I: そのBさん的には、わけてしまうと変な話なんですけど、男性の楽しみ方と女性の楽しみ方ではどちらの方がフィットするって感じなんでしょうか？どういう楽しみ方が自身としてはフィットするのでしょうか？
- B: きっとフィットするのは女の子たちのがフィットするのかなって、今までずっとそうだったんで感じる。ただ女の子の方にフィットすると思いながらも同時に、男の子たちの感じも楽しそうやなってずっと感じてるんで、(中略)自分も同じように楽しみたいなっていうのは常にあるんですね。でも長年の感じ、あってるのはこう女の子たちの感じ、だから基本的に女性的な感じが基本はずっとあってるんですよね。基本を男子の方にすると疲れちゃうんですね、僕は。だから、そう思うけど、基本は女性的な感じの方があって、男のたちと遊ぶのも間間に挟まれば一番いいのかなって思ってる。ただその合間合間に挟むのも今実行できてないんで、まあ一緒に楽しめたらいいなっみたいなんはあるみたいな感じですかね。だからフィットしてるのは女の子、女性のほうなのかなって。
- I: そのフィットしてるのが女性なんだけれども、男性的なのも挟みたいな、という感じなんですね。
- B: そうです、そうです、そんな感じです。
- I: 挟んだことないんですか？
- B: ありますあります。別にあります。あるんですけど、入って、中でやっぱり、入るのは入んですけど、やっぱりこう、きっとみんなみたにこう、真に楽しんではいないんだろうなって、なんかセーブをかけてる、セーブをかけてるってのはおかしんですけど、たぶん性格の問題なんですけど、はっちゃけたらいいんですけど、そのはっちゃけると人の目とかもあるし、自分ののはっちゃけてる自分の違和感とかもあるから、こう真にはっちゃけてる感はないかなって、感じなんですけど。全然、はいるっちゃはいるんですけど、全然あるんですけど。
- I: 間に男の人の真に楽しめたらいいなって感じなんですね。
- B: そうですそうです。そういう自分に慣れたらいいなって感じです。
- I: なんか今のその横線と縦線のイメージは面白いって言っちゃうと変なんですけど、すごいBさんのジェンダーなのかなって伝わってきたんですけど、そういった部分が、前の発言に戻るんですけど、自分が男だと言えないって部分につながってくるんですかね？
- B: たぶん、そうだと思います。さっきの基本的な、生き方は言い過ぎなんかな、基本的な過ごし方として、女性的なのフィットするというのはたぶんそういうことだと思います。
- I: なるほどなるほど。

自身のライフスタイルが女性を基調としながら男性を挟むことが理想であることが語られた。そしてBのライフスタイルが上述した、男だけど断言できないジェンダー・アイデンティティにつながるものがインタビューとBで共有された。Bさんのジェンダー・アイデンティティを曖昧にさせる要因である集団での楽しみ方について、Bさんは女性にフィットすると語った。そして「女

性的な感じが基本」と語ることから、Bさんのジェンダー・アイデンティティのベースが女性的であることが考えられた。しかし、一方で「基本を男子の方にとすると疲れちゃうんですね」「男子たちと遊ぶのを間間に挟まればいいのか」という語りから、Bさんの男性的ありたいがフィット感の無さからベースにはなり得ないことから、男性的なところを部分的にも確保しようとしていることが語られた。佐々木・尾崎（2007）は自己の性別での展望性が認識できているという感覚のことを“展望的性同一性”と定義している。Bさんがジェンダー・アイデンティティとして、女性を基調としながら男性を挟むことを望んでいることから、Bさんのみいだしたジェンダー・アイデンティティは展望的性同一性の感覚が高いものが考えられる。以上のことから女性らしい一面を有していることで男性と断言できないBさんにとって、自己に統合されたジェンダー・アイデンティティが語りの中で再構成されたことが考えられる。

## 【ジェンダー・アイデンティティと性指向の関係】

### ジェンダー・アイデンティティから性指向への影響

#### （第3回目の語り）

- I: そういうジェンダーの在り方と自分がゲイであることに関係することとか、影響していることとか何かあるんでしょうか？
- B: 自分的にはけっこう、生き方がすごい影響しているのになって、やっぱり自分の家族がこう女の子ばかりで、女の子ばかりに囲まれている中で生活するっていうのが当たり前で生きてきたっていうのもありますし、やっぱそれ派生で、学生、今も学生なんですけど、中高とか、中高はさておき、女の子と遊ぶことが多かったんですね。あんまり男の子と遊ばなかつて、っていうのを考えると、その女性に囲まれてる環境が基本になっているんですね、僕は。なんで、なんていうんやろ、ストレートな人は女性を恋愛対象として見るじゃないですか、でたぶん、自分は女の子が当然にすぎで（中略）女の子が普通に友達な感じ。やからその子たちが恋愛対象に見えるようには全然感じないので、たぶんそうだと、ええと、あんまり関わりのない、関わりのないって言っちゃうと変なんですけど、男の子たちの方が、友達にはもちろん見えますけど、その恋愛対象に見えるようになっていくのになってすごい思うので、自分は女性に囲まれて生きてきた環境がすごい影響しているのになって、そうです、そこですごい思いますかね。（中略）なんやろ、だから、自分は環境的に女の子の人に囲まれすぎ、囲まれてから女の子たちは友達みたいなのが頭に入ってるのか、なっていうのが一番影響してるのになって思うんですけど。
- I: そのちょっと、自分の家族っていうと、簡単に家族構成を教えてくださいでもいいですか？

B: 普通に両親と、妹が二人なんですね。やから、お父さんはさておき、まあ兄妹は女の子ばかりじゃないですか？お父さんは仕事に行ってるので、基本的に家にいる状態がその僕以外女の人の状態っていうのがあるのかなって。

(中略)

B: そうですね。たぶん別に女の子しかいない、兄妹に女の子しかいない男の子なんかいっぱいいると思うんですよね。普通にストレートの子なんかいっぱいいると思うんですよね。だから絶対それが影響するってわけじゃないんですけど、自分が思いつく要因としては、それしか思いつかなくて、だからそれが一番大きいのかなってしか考えられなくて、そうなんですよ。

I: Bさんの実感として、そういったまあ周囲の環境っていうのが大きいのかなって思うんです。

B: そうですね、はい。

Bさんが、自身の性指向が男性に向くことについて、「女性に囲まれる環境」の中で女性に同一化して形成されたジェンダー・アイデンティティが影響していることが語られた。Bさんによると、家庭や学校で「女性に囲まれている環境が」基本であったため、女の子を「恋愛対象に見えるように全然感じない」ようになってしまい、「関わりのない」男の子が「恋愛対象に見えるように」なってしまったという。Richard(1989, 金城(訳), 1996)によると、幼少期のゲイは、父親を中心とした同性に性指向が向くことによって、異性愛の少年が母親の注意をひくために父親の真似をすることと同じように、父親の愛情や注意を得たりするために、母親やその代理像と同一化することが起こってくるとされている。Bさんの語りからは父親がBさんの環境内に不在であることが推察されることから、Bさんが母親に同一化した可能性は高いことが考えられる。Bさんは、性指向と女性的であるジェンダー・アイデンティティを形成させた環境と関係づけることで、性指向を自己に統合していることが考えられる。

- I: 今のお話を聞いていて、まあ女性に囲まれていて、女性にまあ女の子に性的興味をもつ対象として見れなくなるっていうのはまあ、理由としてはすぐわかるんですけども、それがどうして男の子に向かうのかなって思いました。
- B: 恋愛の話になるんですけど、なんか入って、人はないものねだりっていうか、相手に自分がないものをねだるっていうのを僕はよく聞くんですけど、てかそういうので考えると、自分は男らしくない感じやから、こう相手にそういうのを求めるようになったのかなって、性格的に。なんでそうすると、男の人を求めるようになるのかなって。とういから、たぶんなんで、女の人とかでも男らしい方とかいるじゃないですか、とか、女性に興味はないんですけど、僕は、とかの方だと、この人いいなと思ったりすることはある。なんで、性格的に自分がない要素を求めた結果、男の人によっていくのかなっていうのは性格的にあるのかなってのはあるんですね。
- I: なるほど、なるほど。性格的にないものっていうと、男らしさっていうと変なんですけど、その…。
- B: 活発さとか前言ったものを求めた結果、やっぱり、そういう人がおるのって、やっぱり女の人よりも男の人の方が多いのかなってことで、自然と、そっちを求めていくのかなっていうか、ていうので男性に向いたのかなってちょっと、今考えて思いましたかね。

自身の女性に近いジェンダー・アイデンティティが、「ないものねだり」という理由から、性指向に影響しているということが語られた。ここでは、女性に囲まれるという環境要因が性指向に影響していると納得していたBさんが、インタビュアーの指摘によって、自身のジェンダー・アイデンティティと性指向の関係を再構成し、「ないものねだり」と意味づけることで、自身の性指向を受容しようしようとしていることが読み取れた。

Bさんの語る「ないものねだり」の文脈では、男性に性指向が向くことが、憧れる要素がある対象に向くこととして説明されている。つまり、「ないものねだり」の文脈では、性指向の主体と対象のジェンダーが曖昧化されている。ジェンダーのイメージを忌避するBさんにとって、性指向を「ないものねだり」と意味づけることは、自身のジェンダー・アイデンティティを受容できるようにしていることも示唆される。

- I: では、今度は似たような質問になるのですが、今度はゲイであることはジェンダーに影響することってあるんですか？
- B: そうですね、なんやろー。ああ、なんかでも、えーと、ゲイの定義って、男の人が男の人に性的指向に向く、だと思っんです。で、えーと、うーん、今はそこまでなんですけど、昔、そうやな、小学校中学校、難しい高校まで行くかな、とりあえず小中高くらいのときって、なんか、今自分って、それこそトランスジェンダーではないとは思っんですけど、自分は男の子であることにどうなのかなってのはあつたんですね。で男の子なのか女の子なのか、ちょっと女の子っぽいところもあるし、なのかなってのはあつて、ただそのゲイの方は、男性を男性が好きになると、という定義に基づくと、自分ゲイであること＝自分は男ってことじゃないですか。
- I: そうですね。
- B: になるかなら、あ、じゃあ、自分はやっぱり男の子なんやみたい、ふうな考え方に落ち着いたっていうのはありますかね。そのおかげ、おかげってうかあれなんですけど、で、自分は昔はちょっと女の子の感じもあるのかなみたい、でも今は、女子、女性、女子っぽいというか、女子っぽい感あるけど男です、て思えるから、自分は、なので、それはゲイのがあつて、男の人が男の人を好きになるっていう定義に基づくと、自分は男なんやふうな考えがまとまったみたいなんはありますかね。
- I: ゲイっていう定義が、男性が、まあ同性愛って言いますし、男性が男性を好きになるってことなので、そういった定義に照らし合わせると自分は男性であるってというのが、確固たるものになる。
- B: そうですね、固められたというか。っていうのはありますね。

ここでは大学生になるまで自身のジェンダー・アイデンティティが曖昧であったところに、自身をゲイと自認することで、自分が男であることに「落ち着いた」が語られた。ゲイの一般的な定義は“男性に性指向が向く男性”であり、Bさんはこのロジックを用いて、性指向とジェンダー・アイデンティティの関係を「ゲイであること＝自分は男」と意味づけることで、ジェンダー・アイデンティティへの内的確信を得ていることが推察された。

しかし、「ゲイであること＝自分は男」という図式のなかで得られた、ジェンダー・アイデンティティは、異性愛中心の社会では、“他者一致的性同一性”の感覚が乏しいことが考えられる。ゲイであることから得られるのは同性愛男性としての感覚であり、異性愛の男性としての感覚は薄いことが想定される。田中(2009)は、異性愛が自明である社会では、“異性愛”が男性というカテゴリーが含まれており、“同性愛”男性は存在自体が不可視化されていると述べている。すなわち、同性愛男性というジ



ェンダー・アイデンティティは，男性という“自己一貫的性同一性”の感覚が得られる一方で，“他者一致的同一性”の感覚が得られにくいことが考えられる。

しかしながら，このように B さんは，ジェンダー・アイデンティティと性指向の関係を意味づけることで，それぞれがお互いに自己の中に受容できるように補い合っている関係が成立していることが，語りから推察された。

## 第 4 章 総合考察

本研究で掲げた目的は次の 2 点であった。

一点目は、彼らがジェンダー・アイデンティティを自己にどのように統合していく過程の仮説を生成することであった。そして二点目は、ゲイ当事者が自身のジェンダー・アイデンティティを自身の人生にどのように意味づけているのかを明らかにすることであった。

第 3 章では 2 人の協力者から得られたナラティブ・データから、協力者それぞれのジェンダー・アイデンティティの理解と、の語りから読み取れる経験の意味づけを通して行われる統合の過程を考察した。そこでは、あえてそれぞれの個別性の高いナラティブ全体を、その発生準にそって細かく考察することで協力者一人一人の人間理解を目指した。

本章では、2 名のナラティブにおける統合性の共通点や、新たに得られた知見をあげ、ゲイ当事者への心理的支援に必要であると考えられる視点について述べた。そして、ゲイ当事者である協力者が当事者でもある筆者に語ることが、協力者にどのような意味をもつのかを考察した。

### 4.1 協力者の語りに現れた、ジェンダー・アイデンティティの統合過程と意味づけにおける共通性

Butler(1990, 竹村(訳), 1999)は、異性愛を当然とする社会でのジェンダー規範は、セックス/ジェンダー/セクシュアリティの一貫性を要請しているために、セックス/ジェンダーの不一致や、ジェンダー/セクシュアリティの不一致は、異性愛規範から脱落し周縁化されると述べている。また、田中(2009)は、異性愛が自明である社会では、“異性愛”が男性というカテゴリーが含まれており、“同性愛”男性は存在自体が不可視化されているとし、

同性愛男性は女性性と関連付けられた属性を無条件に付与されると述べている。

本研究で考察した 2 名のゲイ当事者のナラティブに現れたジェンダー・アイデンティティの統合過程とその意味付けについての共通性としては、どの協力者も、異性愛を当然とする社会でのジェンダー規範の中で、ジェンダー・アイデンティティの自分の人生そのものに対して肯定的に受け入れていることがあげられる。どの当事者も、社会の定めるジェンダーの枠組みの中で、自分のジェンダー・アイデンティティを位置づけることの難しさを実感しながら、その中で当事者それぞれの独自の意味づけを行うことによって、ジェンダー・アイデンティティを人生に肯定的に統合していた。

しかし、その一方で、当事者 2 人のナラティブのから、社会の定めるジェンダーの枠組みの中で、自分のジェンダー・アイデンティティを位置づけることの困難性が浮き彫りになった。二人に共通していた困難性としては、自身の“女性性”の取り扱いである。異性愛主義の社会において、男性に性指向が向くことは“女性性”を意味する。当事者たちの“女性性”は、Altoman(1993, 岡山・河口他(訳), 2010)が指摘しているように、ゲイ集団内のアイデンティティ主張の 1 つでもある。そのため彼らのゲイとしてのアイデンティティに親和性が高いため、性指向を自己に統合する際には別段問題になることはない。しかし、竹村(2002)が指摘しているように、男性であることは女性性の排除が必要であり、当事者の“女性性”ジェンダー・アイデンティティには親和性が低い。このようにゲイである協力者が、ジェンダー・アイデンティティを統合するとき、自身の“女性性”の扱いに困難があり、それをどう意味づけるのかが、重要であった。

#### 4.2 ゲイ当事者がジェンダー・アイデンティティについて語ること

語るという行為は他者にだけ向く行為ではない。人は、自分自身にも語ることによって、自己という確かなまとまりを再認識し、確固とした自己を形作る。Butler(1990, 竹村(訳), 1999)は、「ジェンダーの表出の背後にジェンダー・アイデンティティは存在しない。アイデンティティは、その結果だと考えられる“表出”によって、まさにパフォーマティブに構築されるものである。」と述べている。つまり自身のジェンダー・アイデンティティを語ることは、まさに“語る”というパフォーマンスによって、自己のジェンダー・アイデンティティを再構築する行為である。

いずれの協力者も、自身のセクシュアリティをここまで内省して話すことは初めてであり、語ることが「難しかった」とコメントしている。しかし、インタビューのなかで、協力者たちは自分のセクシュアリティを語ることを、「捉えなおすいい機会になった」「自分を見つめなおすいい機会になった」肯定的に捉えているような語りが得られた。そして語ることによって、「捉えなおした結果、好きなように生きてる(とわかった)」、「別にそこ(ジェンダー・アイデンティティ)をあやふやにしたままでもいいのかなっていうふうに思いました」と語ったように、自身のジェンダー・アイデンティティを新たに肯定的に捉えることができていた。協力者は、特に自身のセクシュアリティのせいでネガティブな出来事があったわけではないが、異性愛主義と男女二元論が残る社会の中で、自身のセクシュアリティを抑圧し、沈黙を守ってきた。そうした当事者にとって、自分自身のセクシュアリティに関心をもたれ、肯定的に語りが受容される場を提供されたことは、肯定的なジェンダー・アイデンティティを

再構築できる，非常に意味のある体験であったことが推察される。

#### 4.3 インタビュアー・インタビュイーとの関係性

語ることによる自己の捉えなおしは個人では促進しない。インタビュアー・インタビュイーの相互関係によって語りは変化する。インタビュアー・インタビュイーの関係性の構築には，両者の親密さの度合い，年齢，性別，セクシュアリティが影響してくる。協力者と同じゲイである筆者は，協力者の年齢や身体的性別，そしてセクシュアリティ等が近かった。そのため，協力者は自身のセクシュアル・マイノリティとしての個人の主観について安心して語ることができたであろうことが考えられる。渡辺(2005)の調査では，ゲイ当事者は，ゲイとの関係性との関係を「こっちの世界」と異性愛者を「あっちの世界」と称し，それぞれの空間を明確に区別し，分断されていることが，見られた。インタビュアーがゲイの関係の世界の住人でありえることで，インタビュイーはマイノリティとしての仲間意識をインタビュアー持ち，自身のセクシュアリティについて話やすさがあったことが推察される。また，インタビュアーも同様に仲間意識があり，セクシュアリティについてかなり個人的なことを聞くことに抵抗が低かったことが考えられる。こうしたことから，本調査では，同じマイノリティということから，個人的・主観的な相互交流が生じやすかったと考えられる。

しかし，一方でインタビュアーとインタビュイーの類似性の高さが本調査でネガティブに働いた面があったことが考えられる。具体的には，インタビュイーのセクシュアリティの個別性への理解の困難性があげられる。筆者は，インタビュー調査時に，インタビュイーとのセクシュアリティの類似性の高さから，まるで筆者のセクシ

ュアリティとの同一性を確認する為に質問しているのではないかと感じる事があった。そうしたことから、インタビューに筆者自身のセクシュアリティの価値観を押し付けているのではないかと感じ、質問することや筆者の理解を伝えることを躊躇う事があった。また、インタビューの個人の意味づけを追求することを念頭に置いたため、筆者とインタビューで共通したことは、ゲイというセクシュアリティでは当然なこととして理解してしまい、追求して質問することを失念してしまいそうになることもあった。このように、インタビュー者とインタビューとで同房意識のようなものが芽生えてしまいがちであったことから、インタビューの個別性を理解するために、インタビュー者とインタビューが異なるセクシュアリティであることを、筆者は意識的に留意した。以上のことから、本調査において、インタビュー者とインタビューの類似性から、ゲイの集団内の共通性とインタビュー個人の意味づけを区別することの困難性があったことが考えられる。

#### 4.4 ゲイ当事者への心理的支援

本研究の結果から、臨床の場においても、ゲイ当事者のセクシュアリティは、異性愛者の中での自己とゲイとしての自己の間で揺れていることを意識し、受容する必要性があることが示唆された。そうしたゲイ当事者の揺らぎを理解するためには、臨床家は、自身のセクシュアリティを意識する必要があると考えられる。風間・河口(2010)は、同性愛者と関係性をつくる上で、同性愛者も異性愛者も“クローゼット”の存在を意識しなければならないと述べている。“クローゼット”とは“カミングアウト”に密接する言葉である。そもそも“カミングアウト”という言葉は、“カミングアウト・オブ・ザ・クローゼット”という英語の言葉を略したものであり、自己の

セクシュアリティを開示することを意味する(風間・河口, 2010)。つまり, “クローゼット”とは, セクシュアリティを開示する前に自分の中に押し込めていること, や社会・他者に対して秘匿していることを揶揄した言葉なのである。異性愛者は社会的に自明であるために, “クローゼット”がないように思われるが, その自明性があるゆえに, 自身のセクシュアリティを社会的に開示されることはなく, ある意味で“クローゼット”の状態であるといえる。風間・河口(2010)は, こうした“クローゼット”を認識することは, 同性愛者にとって, 自己と社会の関係を通じて自らのセクシュアリティが抑圧されているかを知ることであり, 異性愛者にとっては, いかに自分のセクシュアリティに対して無意識であったかを理解し, 自身のセクシュアリティが“異性愛が至上主義であるように構造化されたセクシュアリティ”でることに気づくと述べている。つまり, 臨床家は, 自身のセクシュアリティを意識化することによって, 初めていかに同性愛者が社会的に抑圧されていることを気づくことができると考えられる。こうした気づきによって, 臨床家は, マジョリティとマイノリティの権力関係を越えて, ゲイ当事者と関係を結ぶことができるようになり, 当事者の異性愛者の中での自己とゲイとしての自己の間で揺れているセクシュアリティを理解し受容することができるようになると考えられる。

## 第 5 章 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界と今後の課題について 2 点述べる。

まず 1 点目は、協力者の偏りである。本研究において、女性的な一面があるゲイの方が対象となったが、当然男性性を追い求めているゲイの方もいる。またトランスジェンダー(身体的性別とジェンダー・アイデンティティが異なる人)でゲイの方や、“オカマ”や“オネエ”と自身を形容するゲイである方もいるなど、ゲイの中でも、大きく見て、ジェンダー・アイデンティティが異なるであろうゲイ当事者内でのカテゴリーが他にも存在する。そのため、本研究結果を過度な一般化につなげることはたいへん危険であるといえるだろう。今後、本研究をより一般化させるには、様々な自身をゲイと自認する方を対象に同様の考察を行っていき、比較検討していくことが必要である。

2 点目は、相手のジェンダー・アイデンティティを尋ねるときの問いの立て方である。セクシュアリティやジェンダーについて学んでいるものであれば、ジェンダー・アイデンティティを指すものが必ずしも男女の 2 分したものではなく、男女の間のグラデーションや、男女に位置づけないジェンダー・アイデンティティの認識があることを知っている。しかし、そうでない当事者にとって、ジェンダー・アイデンティティを尋ねることは男女どちらかを尋ねるのかに他ならない。また男性的か女性的かの問いも、男性と女性の両極端のイメージを喚起させてしまい、それぞれの男性と女性のカテゴリーの中の幅を持たせて問うことができなかった。インタビュー時に、ジェンダー・アイデンティティについてある程度インタビュアーから教えることはあったが、当事者の男女二元論的な見方が大きく変容したことは語りの中で見



られなかった。事前に詳しくジェンダー・アイデンティティを含めたセクシュアリティに関する心理教育を行うことを通して、インタビュアー・インタビュイーでセクシュアリティに関する捉え方の共通認識を形成すべきであったと考えられる。

## 引用文献

- Cass V (1978). Homosexual identity formation : A theoretical model. *Journal of Homosexuality* 4 ; 219-235.
- Dennis Altoman(1993).HOMOSEXUAL Oppression and Liberation. Outerbridge : Dienstfrey. (デニス・アルトマン 岡山克樹・河口和也・風間孝(訳). (2010)ゲイ・アイデンティティ 抑圧と解放 岩波書店).
- Dreger, Alice Domurat (1999). Intersex in the age of ethics. Hagerstown, Maryland: University Publishing Group.
- 枝川京子・辻河昌登(2011). LGBT 当事者の自己形成における心理的支援に関する研究ーナラティブ・アプローチの視点からー 学校教育学研究, 23, 53-61.
- Fausto-Sterling, Anne (2000). Sexing the Body: Gender Politics and the Construction of Sexuality. New York: Basic Books.
- Fassinger, R. E; McCarn, S. R. (1996). "Revisioning sexual minority identity formation: A new model of lesbian identity and its implications for counseling and research." *Counseling Psychologist*. 24: 508-534.
- Giddens, Anthony (1991) Modernity and Self-Identity. Self and Society in the Late Modern Age. Cambridge.
- Herk, G.M., Gillis, J.R., & Corgan, J.C. (2009). Internalized stigma among sexual minority adults: Insights from a social psychological perspective. *Journal of Counseling Psychology*, 56.(1), 32-42.

- 日高庸晴(2000). ゲイ・バイセクシュアル男性の異性愛者の役割葛藤と精神的健康に関する研究 思春期学, 18(3), 264-272.
- 日高庸晴(2008). インターネットによる MSM の HIV 感染予防行動に関する行動疫学研究—REACH Online 2008— <http://www.gay-report.jp/2008/index.html>
- 平田俊明(2014). レズビアン, ゲイ, バイセクシュアル支援のための基本知識 針間克也・平田俊明(編). セクシュアル・マイノリティへの心理的支援 (pp109-122) 岩崎学術出版社.
- 保坂裕子(2000). 多声的時空間におけるアイデンティティ構築: アイデンティティ研究におけるナラティブ・アプローチの可能性について 京都大学大学院教育学研究科紀要, 46: 425-437.
- 石丸径一郎(2004). 性的マイノリティにおける自尊心維持—他者からの受容感という観点から— 日本心理学研究, 75, 3, 191-198.
- 石丸径一郎(2008). 同性愛者における他者からの拒絶と受容: ダイアリー法と質問紙におけるマルチメソッド・アプローチ. ミネルヴァ書.
- Judith Butler(1990). GENDER TROUBLE Feminisim and the Subversion of Identity . Routledge, Chapman & Hall. (ジュディス・バトラー 竹村和子(訳). (1999) ジェンダートラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱 青土社).
- 風間孝・飯田貴子(2010). 男性同士の結びつきと同性愛タブー—スポーツをしている男性のインタビューから好井裕明(編) セクシュアリティの多様性と排除 (pp93-124) 明石書店.
- 風間孝・河口和也(2010) 同性愛と異性愛 岩波新書.

- 葛西真紀子(2014). 児童期・思春期のセクシュアル・マイノリティを支えるスクールカウンセリング (針間克也・平田俊明編著). セクシュアル・マイノリティへの心理的支援 (pp109-122) 岩崎学術出版社.
- 葛西真記子(2016). セクシャル・マイノリティを支える精神療法 42, 1, p19-23.
- 金城理枝(2016). 心理職による LGBT への支援 (青木省三・宮岡等・福田正人監修)こころの科学 189 LGBT と性別違和. pp39-44, 日本評論社.
- 川野健治(2005). 質的データの分析技法動きながら識る, 関わりながら考える心理学における質的研究の実践 伊藤哲司・能智正博・田中京子(編)(pp119-140) ナカニシヤ出版.
- 加藤・渡辺(編著)(2010). セクシュアルマイノリティをめぐる学校教育と支援 増補版 ～エンパワメントにつながるネットワークの構築にむけて～ 開成出版.
- 河口和也(1999). 『ゲイ』が『男』を捨てるとき… (年舘森樹編著) はじめて語るメンズリブ批評. 東京書店.
- 宮腰辰夫 (2012). セクシャルマイノリティを生きるということ : 同性愛者がセクシュアリティを受け入れるプロセス 大正大学カウンセリング研究所紀要-(35), 63-77, 2012-03.
- Money, J.(1965). Sex research; New developments. New York: holt, Rinehart and Winston.
- 中村美亜(2006). 新しいジェンダー・アイデンティティ理論の構築に向けて・生物・医学とジェンダー学の課題・ Gender and sexuality : journal of Center for Gender Studies, ICU 02, 3-24.

- O'Neil, J.M., Helms, B.J., Gable, R.K., David, L., & Wrightsman, L.S. Gender-roll conflict scale: College men's fear of femininity. *Sex Roles*. 14, 335-350.
- 佐々木 掌子・尾崎 幸謙 (2007). ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成. *パーソナリティ研究*, 15, 3, 251-265.
- 佐々木 掌子・平田 俊明・金城 理枝・長野 香・梶谷 奈生・石丸 径一郎・松高 由佳・角田 洋隆・植村 道子・葛西 真紀子 アメリカ心理学会 (APA) 特別専門委員会における『性指向に関する適切な心理療法対応』の報告書要約 *日本臨床心理学会*, 2012, 30, 5, 763-773.
- 佐々木 掌子 (2016). セクシャル・マイノリティに関する諸概念 *精神療法* 42, 1, p9-14.
- 桜井 厚 (2002). インタビューの社会学ーライフストーリーの聞き方ー *せりか書房*.
- 桜井 厚・小林 多寿子 (編) (2005). ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門 *せりか書房*.
- Slaby RG, Frey KS (1975) Development of gender constancy and selective attention to same sex models. *Child Development* 46 ; 849-856.
- Stoller, R.J. (1964). A contribution to the study of gender identity. *The international Journal of Psycho-analysis*, 45, 220-226.
- 多賀 太 (2001). 男性のジェンダー形成ー〈男らしさ〉揺らぎのなかでー *東洋館出版社*.
- 竹村 和子 (2002) 愛についてーアイデンティティと欲望の政治学 *岩波書店*.
- 柘植 道子 (2014). セクシュアル・マイノリティ大学生を支える学生相談 針間 克也・平田 俊明 (編) *セクシュアル・マイノリティへの心理的支援 (pp109-122)* *岩崎学術出版社*.

- 竹家一美(2008). ある不妊女性のライフストーリーとその解釈:「不妊」という十字架を背負って 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 152-165.
- 田中俊之(2009). 男性学の新展開 青弓社.
- Troiden RR(1989). The formation of homosexual identities. *Journal of Homosexuality* 17; 43-73.
- 渡辺大輔(2005) 若年ゲイ男性の学校内外での関係づくり—学校空間が持つ排除と分断の政治の検討にむけて—. 日本教育学研究, 72, 2, 210-218.
- 薬師実芳・笹原千奈美・古堂達也・小川奈津己(2014). LGBT ってなんだろう? からだの性・こころの性・好きになる性 合同出版.
- やまだようこ(2000). 人生を物語ることの意味—なぜライフストーリー研究か?— 教育心理学年報, 39, 141-161.
- やまだようこ(2007). 質的心理学の方法 新曜社.

## 謝 辞

本論文の作成にあたり，多くのご指導ご鞭撻をくださいましたすべての方々に，まずは心より感謝の気持ちを申し上げます。

そして，筆者が感じていた本研究の必要性や目的に共感してくださったうえに，拙いインタビューに快くご協力くださった2名の皆様，本当にありがとうございました。偏見や差別がまだまだ多い社会の中で，マイノリティとして自身のセクシュアリティを語ることはとても勇気のいることだったと思います。そうしたみなさまの語りを聞かせていただくという貴重な体験は研究の枠を超えて，私自身の生き方についていろいろなことを考えさせてもらうきっかけとなりました。

本研究に際して様々なご指導をいただきました，主任指導教員である富永良喜教授，指導教員である鈴木菜実子講師に深く感謝いたします。また，ウィリアム・アラソン・ホワイト精神分析研究所の Masato Tsujikawa, Ph. D. には研究の進め方に関するご指導にとどまらず，精神的な面でも本当にたくさん支えていただきました。最後まで辛抱強く見守ってくださったことへの気持ちは申し上げきれません。本当にありがとうございました。

今後，臨床の場に学んだことを活かすことにより，皆様の御厚情にお答えできますよう，一層の努力をして参ります。修士論文の作成を含めた学生生活にあたり，私を支えてくださった，ここではすべて挙げきれないほど多くの皆様に感謝を申し上げ，謝辞とさせていただきます。

二年間，本当にありがとうございました。

2016 年 12 月 20 日

## インタビュー調査ご協力をお願い

梅雨明けの候、皆様におかれましては益々のご清祥のことと存じます。突然このようなプリントをお出しすることをお許しください。私は兵庫教育大学大学院 臨床心理学コースに在籍する阪口武と申します。

私は修士論文の研究として、セクシャル・マイノリティ中のゲイの方々の心理的サポートに関する研究を行っています。その際、当事者の方々のご経験や考えを聞かせて頂き、性の多様性への理解や当事者のサポートを検討していく上での参考にさせていただきたいと思っております。調査内容につきましては、下記の通りですので、ご高覧のうえご検討のほどよろしく申し上げます。

なお、インタビュー内容については、下記に示すような研究協力者のプライバシー保護および、倫理的配慮について遵守しますので、ご安心頂ければ幸いです。

お忙しい中、誠に恐縮ではございますが、本研究の趣旨をご理解の上、どうぞご協力頂きたく、ご依頼申し上げます。

敬具

### 記

#### <聞き取り調査について>

- ・調査名：ゲイ当事者の性同一性に関する研究
- ・目的：性同一性の側面から、ゲイ当事者のセクシュアリティの理解を深める。
- ・ご協力をお願いしたいのはご自身がゲイであることを自覚されている方、またはゲイかもしれないと迷いをもたれている方です。また上記の方をご紹介していただいても結構です。
- ・具体的な質問内容としては、当事者としてご自身のセクシュアリティについて、そしてその中で特にジェンダーについてこれまで感じられてきたこと等です。例えば「あなたのセクシュアリティについてご自由にお話してください」「これまでで自分のジェンダーに迷いを感じることはありましたか」「ゲイであることはご自身のジェンダーに何か影響はありましたか？」などの質問に個人的経験でお答えして頂きたいと思えます。
- ・面接は3～5回程度を予定しており、時間は1回につき50分程度です。

#### <プライバシー・個人情報の取り扱いについて>

- ・面接内容は統計的に処理し、個人が特定される形で結果を報告しません。
- ・研究協力者の面接内容や個別情報については、守秘義務を遵守します。
- ・インタビュー調査時の録音は、調査協力者の同意が得られた場合にのみ行います。
- ・面接中のメモや録音記録（面接データ）の管理については細心の注意を払い、研究終了後、一定期間経過後に粉砕・廃棄します。
- ・録音は実施分担者のみが聞いて文章に起こし、分析はその文字データを用います。
- ・面接データは個人を特定できないように番号化して入力され、特定のUSBメモリーに保存して施錠ができる引き出しで厳重に保管した上で、研究終了後、一定期間経過後に粉砕・廃棄します。
- ・面接結果は統計的に処理された上で、学会発表や学会誌に発表されますが、発表の際には個人が特定できない形態で行います。



<倫理的配慮について>

- ・面接調査へのご協力は自由意思によります。
- ・回答したくない質問がありましたら、無理に回答する必要はありません。
- ・回答を途中で止めたくなった場合には止めても、ご協力を撤回してもいかなる不利益も生じません。
- ・研究の内容にご意見ご質問がありましたら、実施分担者にお尋ねください。
- ・研究へのご協力については、依頼書に基づいて口頭および文書で説明を行い、同意書のご署名により同意を頂いたものとして実施いたします。

以上のことにつきまして、ご承諾いただきました方は、お手数ですが以下の欄にご記入いただき、阪口までお渡しくくださいますか、下記の連絡先まで直接ご連絡いただきますよう、よろしくお願い致します。もちろんここにご記入されたことも個人情報として厳重に取り扱いいたします。

<調査に関するお問い合わせ先>

兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 人間発達教育専攻 臨床心理学コース

修士2回生 阪口武

連絡先 携帯電話番号 : 080-6213-1505

E-mail アドレス : tkr.gaga3715@gmail.com

-----

お名前 ( )  
ご連絡 (電話番号 : )  
(E-mail アドレス : )

\*電話番号・メールアドレスの両方またはどちらかをご記入ください。

聞き取り可能な曜日や日にち(今の時点でお分かりになる範囲で結構です)

[ ]

## 同 意 書

「ゲイ当事者の性同一性に関する研究」にかかるインタビュー調査について説明者より次の事項について説明を受け、内容を理解した上で、インタビュー調査に協力することに同意しました。

説明を受けた事項

- ☐ 研究の概要とその目的
- ☐ 面接方法について
- ☐ 研究における倫理的配慮
- ☐ 本人の自由意志に関する同意があること
- ☐ 同意後も不利益を受けず随時撤回できること
- ☐ 同意しない場合も不利益を受けないこと
- ☐ 個人情報保護されること
- ☐ メモや録音などの面接データの取り扱い
- ☐ 研究結果の発表形態

平成 年 月 日

氏名： \_\_\_\_\_

「ゲイ当事者の性同一性に関する研究」のためのインタビュー調査実施にあたり、書面及び口頭により、平成 年 月 日に説明を行い、上記のとおり、同意を得ました。

説明者：兵庫教育大学大学院学校教育研究科人間発達教育専攻臨床心理学コース 2 回生

氏名： \_\_\_\_\_